

すゝむし

Vol.3 No.8 夏季特大号

おとしぶみ特集
(通巻200篇突破記念)

1953年8月

倉敷昆虫同好会



目

次 (1)

1953年8月号(Vol. 3 No. 8)

愛知学号—ホとしぶみ 特集—

著 者 名	一 覧 目 録	著 者 名	Page
	— 単 位 上 —	杉 山 生	1
	虫とにんい	安江 安宣	2
	根口虫(コガネムシ類幼虫)の母種 垂直移動について	中塚 憲次	4
	ダイコンアブラムシ <i>Brevicorys brassicae</i> L. のニンジンの生態に ついて (稿 読 変 更)	尾山 博志 河田 和雄	10
	広瀬市附近の蜂巻	古市 景一	13
	ヒミノタカラクダニ寄生の蟻卵がー 飼養(才出版) 長野市野々木山	広瀬 義躬	24
	管絃寺那山脈線虫採集報告(才出版)	小野 洋	47

おとしぶみ(特集—33篇)

～ 通巻200誌愛知紀要～ No. 218～No. 250

分 布 資 料 (12篇)

愛知群産の昆虫物種誌	古市 景一	29
タコラ山で採集したメダカカミキリの 1種	小野 洋	30
熊山にヤコンオサムシ	友野 良一	30
岡山より記録するバヤミョウ2種	広瀬 義躬	31
伯耆大山のムツモンギョウリゾウムシ	小野 洋	31



(2)

Page

伯耆大山のナガタムシ3種	小野 洋	31
伯耆大山のベニヒラタムシ	全	32
県南部より記録するハナノミ2種	全	32
アサギマダラは土着しているか?	水野 弘造	32
シルヴィアシジミの新産地	守栗 瑞夫	33
稲山にミドリシジミ	水野 弘造	33
小黒田のトビロサシガメ	小野 洋	34
生態観察資料(16篇)		
アオスジアゲハの一経過	広瀬 義躬	34
今年の初観数例	古市 景一・小野洋・広瀬義躬	35
コアオハナムグリの早期出現	広瀬 義躬	35
巻紙に於けるイカリモンガとその発生期に関する疑問	全	36
シンジコサン類の木の葉を食す	古市 景一	36
イナダクはアカタテハの侵害か?	広瀬 義躬	37
ウリハムシの花弁侵害	全	37
ドウガネブイブイの威嚇動作	小野 洋	37
ヒオドリチヨウの発音	広瀬 義躬	39
アオスジアゲハの地域占有2型	全	40
ツマグロヒョウモン(1)の山頂占有性	全	41
ムシヒキアブ捕食2種	広瀬義躬・小野洋	42
蝶の訪燈数例	広瀬 義躬	42
ヤマトシジミ♀の再交尾	全	43
巻紙産ラミーカミキリ小記補遺	全	43
ホシミスジMemo(1)	全	44
形態・その他の資料(5篇)		
モンキチョウの雌雄型を採集す	広瀬 義躬	45
紀州のイタドリムシ	古市 景一	45
アブラビミの発生地?	広瀬 義躬	46
ヤコンオサムシの性比	古市 景一	46
汽車による蝶の移動の1例	広瀬 義躬	47

一筆啓上

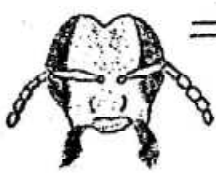
杉山 生

私は最近に来てから逾く4ヶ月になつたにすぎないから、會報を中心とした昆虫、更に虫札を又中心として出来た同好会の方々に云々する資格のないことは云うまでもない。併し5月10日に大原農研で行われた例会に出席して、その活発な活動を目の前に見て、大いに欣快の念は堪へなかつたと同時に、この様な同好会の方々の行動が20—30年前とは非常に趣を興じて来たことを痛感した次第である。つまり同好会のレベルがあがって来たと云うことである。又は当然のこと、あがるにすればその方が余程不思議なのだ。

併しここで考へなければならぬことは、同好会の性格と云うことである。又は専門家の集いではなく、あくまでも趣味を同じくした方々の集いであらう。勿論専門家と排他すると云うわけではなく、現に専門家も會員として加わつて居る例も多々あり、又その方が望ましい所でもある。併しあまりに専門的に分化し過ぎると、気軽な趣味的な感覚がなくなり、堅く正しいものになつて来る。之では同好会としての発展は望まれない。

私は、同好会と云うものは、玉石混在が本来の姿ではないかと思う。入会したくとも、玉ばかりの中に石として入るかはなかなか勇気が要る。先輩の石が多数居らねば、自分が新しい石として加わるのは気が楽である。併しこの石は段々磨かれて玉になり、玉が宝になり、一方又新しい石が加わつて来ると云う次第でその会が発展して行くのではあるまいか。甚だ失礼な表現をしたが、私も新しい石として本会に入った次第だから悪しからず願たい、例会も学芸式ではなく、もっと気軽に放談会式の空気が熱いものもあつてよいのではあるまいか。

つい、書いて居る間に、會費額外と云うより、幹事諸君に敬意を述べると云う形になつて来たが、今回はこの辺で御免蒙つて、桐葉することとした。 (同大大原農業生物研究所(植物昆虫研究室))

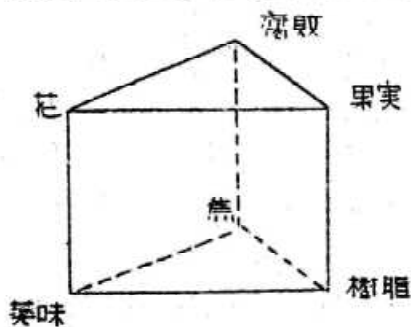


＝ 香 と におい ＝

安 記 安 宣

においを言葉で表わすことは非常にむづかしい。なぜならば、においには基準になるものがなんであるか判らないからである。例えば色の場合には赤、青、紫、黄などと色そのものをはっきりと示す言葉があり、また味にしては、甘、酸、苦、塩などの基準となる性質がほぼわかっている。ところが不幸にして、虫のにおいの場合は人によって感受する程度が異なり、或るにおいを誰にでもわかるように適確に表現することがむづかしい。しかし普通一般に使われているのは良い匂いとか悪い匂いと言う表現であるが、これは生理的にみて快、不快の語にほかならない。要するに感受性が化学物質によって作り出される感覚細胞が刺激されるに依るが間違いない。

今から30年程前にドイツの心理学者 Henning は「においのプリズム」なるものを案出した。彼は先ずにおいの基準としてつぎの6種を選んだ——



らに三棱形の6個の頂角に配位し、尖角においを表わすものとしては、花はスミレ、果実はレモン、腐敗は硫化水素、菜味は肉豆蔻、樹脂は乳香、焦臭はタールとらって代表させた。

前置きがいさゝか長くなったが昆虫類は虫のにおい以上ににおいに敏感なものが多く、特に双翅目、鱗翅目、鞘翅目などにおいて著るしい。

それならば昆虫では一体どの部分に嗅覚器官があるのかと云うとそれは触角である。ドイツの動物学者 von Frisch は蜜蜂について之を実験的に証明している。即ち蜜蜂では触角は2節よりなっているが、そのうち先端からの8節には無数の孔があり、之に神経の末端が分布して有孔盤といわれる器官をなしている。この8関節を全部除くと蜜蜂は全く嗅覚機能を失ってしまうのである。

次に昆虫が何故花を訪ねたり腐肉に集ったりするかと云うと、これは個体維持の本能から食物をたぎりにくるのである。昆虫の食性は単食性と雑食性、肉食

性と草食性に分類することが出来る。草食性昆虫のうちで単食性の有名なものでは蚕がある。蚕はクワ科植物のなかのクワ属 *Morus* の葉を限って之を喰べる。恐らく桑属植物に含有される特殊の成分に因るものと思われるが今日の所では如何なる嗅気が或は味のものであるかは未だ不明である。又モンシロチョウの幼虫は御承知のように十字科植物のみを喰害するが、これはオランダの学者 *Verschaffelt* によると十字科植物に共通に存在する精油の一種芥子油のにおいがモンシロチョウの食性を決定するものであることがわかった。

またニンジンなど繖形科植物のみを食草とするキアゲハの幼虫はこの科の植物に共通に含まれている精油類 (*Methyl chavicol*, *Anethol*, *Carvone*, *Anisic aldehyde*, *Methyl nonyl ketone*) のにおいに誘引されることがアメリカの昆虫学者 *Detkier* によって明らかにされたのである。

次に家畜、魚類の臭が腐敗物持になまぐさい海産臭類に化かるが、この臭の腥臭の本質はトリメチルアミンなる物質のためであり、これは新鮮な臭にも僅かに存在しているが、魚体表面に附着しているバクテリアの分解作用によって次第にその量が蓄えてくるので、水産学界では臭類鮮度の目安としてトリメチルアミンの定量を行っているほどである。ところがフランスの昆虫学者 *Ricoubaud* の研究によると実験的にトリメチルアミンはバレリアン酸アンモンと共に蟻類を一旦誘引する物質であることが分った。バレリアン酸のにおいは蚤の臭い日に靴を歩いて歩くと靴下が汗のためによりやむ臭いになるおの臭気である。

昆虫の嗅覚が先ずその食物摂取に意義があることは前述の通りであるが、次に嗅覚の性的意義は更に重要なものがある。特に夜間活動するものでは雌雄相会するには多くの場合雌に強力な雄誘引腺から持ってくるのにおいを分泌する。又蟻のオスは特種り分泌によってその通路を知らせ合ったり、種属の異なる蟻が迷い込んだりするとその体臭によって区別してこれと仲間からつまみだしたりするが、花に花言葉があるようにこの場合などはにおいにも「言葉」的意義があるものと考えられる。

このように昆虫の多くは或る特定のにおいに強く反応する性質があるので種々の香料を利用して害虫を誘殺したり忌避させたりすることが出来る。例えばユーカリ油やカユブテ油を皮膚に塗っておくと蚊やその他の吸血性昆虫の襲来を防ぐことが出来るが今次大戦中米軍は之れに勝るフタール酸ザメルと云う薬品を發明してジャングルに威力を發揮し、この薬の有効時間は約6時間位である。

花分蜜の本体である精油の濃度が或る程度以上に濃くなると虫を忌避さすう
之に殺虫作用を及ぼしてくる。私が実験したところでは、あの可愛しい花をつけて
いる鈴蘭やシクラメン、或いはバラ、ミモザの花から抽出した香水は5000倍
程度に希すのでは尚ホーフラを殺す作用がある。

—岡山大学大原農業生物研究所作物害虫学研究室—

(1953. 8. 10 受)

根切虫(コガネムシ類幼虫)の 日週垂直移動に就て

中 塚 憲 次

(岡大大原農業生物研究所)

I. 緒 言

コガネムシ類の植物根に及ぼす被害は実に大きく多量に云って指摘するま
でるないが、特に林業方面に於ける移植過程に於いてこの幼虫の根糸侵害によ
る影響はそれらの移植生育に甚大な障害を惹起させる事を見出し、通りである。

ところで、本虫の生態的に垂直移動については相当以前から多くの研究者によつて
発表されてある方であるが、著者は1952年東宮野博士の御指導によつて本虫
の垂直移動中に季節的变化について研究して見た結果非常に面白い垂直移動の季
節的成長とキヤッチする事が出来た。

こうした季節的成長は更に日週変化によつてその変化ははっきり表され、特に早
朝に於いては相当高い地帯近くに棲息若しくは地上に這出して来るものがある事
実はすでに指摘されてあるのだが、著者は特に土壤温度と垂直移動の関係を以て
観察したいと考へてこれが調査に乗出した所、土壤温度と垂直移動と方向には
なりはつきりした関係のある事実が判明した。又一方温度に於いても考へてみ
たが不意にして地中に於けるやいは醒れる事が出来た。

本調査を行うに當り種々の御教示を賜り頂いた農林省林産部林業課長野野村監野
村久博士、及び調査に當り常に忠実に助力された双尾幸、植月満子、藤田幸子、
木田美代子、安藤辰子、久保美智子氏等外30数名の方々に対し衷心より深甚の
謝意を表したい。

II. 調査方法及び場所

本調査は岡山県美作郡植月村所在の岡山県林業試験場苗圃に於て施行され、特に年間向の休床地又は掘取跡地を対象として行なわれ、いずれも6ヶ月以上放置された火山灰土壌に由来する。

調査面積は1区を1m²とし各月の調査は10区で、又一方日廻垂直移動の調査に当っては調査の順序上1調査区として2区を使用した。

次に調査深さは0~10, 10~20, 20~30, 30~40 (cm)の4階層とし(更に0~5, 5~10 (cm)の深度の分割調査の重要性が判然としたので日廻変化については特にこれらの方法を行なった)、各深度の土壌は篩で過し、在虫数を記録した。

特に本地方の苗圃にはナガチマコガネ、ヒメコガネの幼虫が大多数を占めてお

III. 調査結果

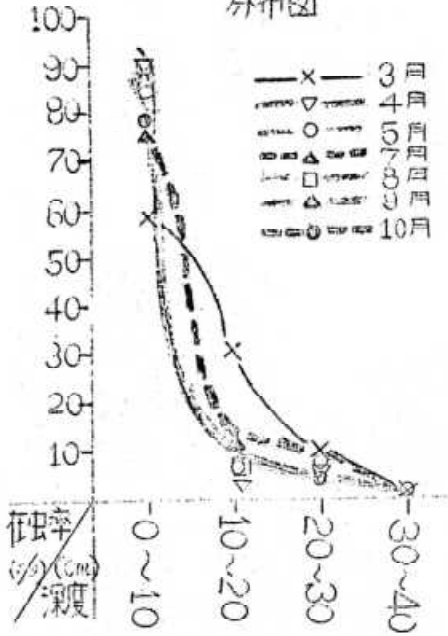
日廻垂直移動の問題を述べるに当り前者は年間(3~10月迄)に於ける所謂根切虫の活動時期における垂直移動の実態を日廻変化のそれと比較する必要性からオ1表及びオ2表, オ1図及びオ2図にそれを表示する。

オ1表 年間(3~10月)に於ける根切虫の垂直分布

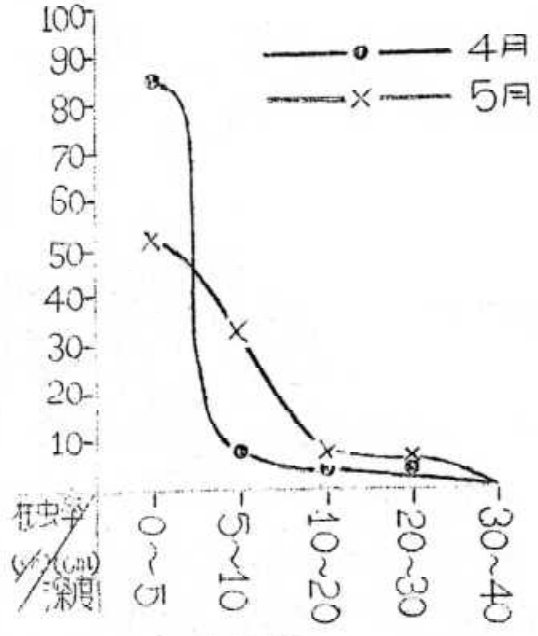
調査 深度 (cm)	3月		4月		5月		7月		8月		9月		10月	
	総数	種類	総数	種類	総数	種類	総数	種類	総数	種類	総数	種類	総数	種類
0~10	83	59	223	91	86	86	51	77	90	90	113	86	57	79
10~20	45	31	8	3	7	7	7	11	7	7	8	6	13	18
20~30	12	9	11	5	6	6	6	9	3	3	6	5	2	3
30~40	2	1	1	0	1	1	2	3	0	0	5	4	0	0
前記物名	椋原苗		椋原苗		椋原苗		椋原苗		椋原苗		椋原苗		椋原苗	

備考：各区ごとの1区のTotal を示して表示した。

オ1図 年間(3~10月)に於ける根切虫の垂直分布図



オ2図 根切虫の垂直分布



オ2表 根切虫の垂直分布

(オ1表、オ1図の4、5月0~10cmを0~5、5~10cmに分割して見付
A) 4月15日調査(1~6区松床替 7~10休耕地)場付)

深度(cm)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	総数	%
0~5	1	0	1	3	0	5	51	61	49	34	205	84.4
5~10	0	0	0	0	0	0	2	10	6	0	18	7.1
10~20	2	0	0	0	1	0	1	2	2	0	8	3.3
20~30	0	0	0	0	0	0	1	2	2	6	11	4.5
30~40	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.4

B) 5月27日調査(検床菅跡地)

深度(cm) \ 区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	総数	%
0~5	3	1	3	3	19	13	3	1	4	3	53	53
5~10	5	1	4	2	4	3	5	3	4	2	33	33
10~20	0	0	2	1	1	0	0	1	0	2	7	7
20~30	1	2	1	0	0	0	0	0	1	1	6	6
30~40	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1

備考: 1) 本調査は両者とも比較的晴天である。

2) 調査は8~12時迄でいづれも終了した。

オ1表及びオ1図より明瞭な如く各月に於ての垂直分布はあまり大差が見られず3月に於てかなりはっきりしたものを示すが、更にオ2表及びオ2図に示す如く調査深度0~10cmを0~5, 5~10cmの2区に分割して考へて見ると季節的変化もよりはっきりしてくるのではなからうか、即ち4月、5月の両調査に於いて地表近くの土壤温度が未だあまり高くなっていない4月中旬に於て0~5cmの深度範囲に於ける Popiration は84.4%を示すが、5月下旬に於いては環境温度の上昇に伴ってそれが53.0%に低下移行してある事実で、これは本虫が温度に対して非常にデリケートに働くと言う事実である。

こうした事から年間に於ける棲息深度、及び加害の時期を大きく3つに分ける事が出来そうである。

即ち、オ1グループは1, 2, 3, 11, 12の各月にあるものでこれらのものは棲息深度が浅く、加害もほとんど行なわれない。

オ2グループは4, 5, 8, の各月にあるもので棲息深度は大多数非常に浅く加害も相当深刻である。

オ3グループは6, 7, 10月頃のものでこれらは前記二者の中間的傾向をもち深度とかなり低下してある。

即ち、こうした事はこれら根切虫が環境温度と密接に關係し棲息深度及び加害率に大きくその性格を表はしてある。

8(81)

即ち舊著の仮定したオ2グループは春季、晩夏、初秋)あまり高温でない時期にあたり加害も最も大きく年間の被害は大部分この時期に当るもので、棲息深度と加害時期との間には相当重要な意義のある事実が判明した。

即ち、こうした季節的变化と云ったものの傾向が、温度変化(環境温度)によって支配されるとすれば、休眠と云う特殊な状態に直面していない場合、本虫はボクボクその時に於ける環境温度によってその季節的变化と多少の相違はあっても似た傾向をむつりではないかと考えられる。

こうした事から舊著は1953年6月4日8~18時の間に於ける土壤温度湿度及び本虫の垂直分布の関係について調査を試みた。

結果はオ3表及びオ3図に示される。

オ3表 根切虫の垂直分布と土壤温度との関係

A) 根切虫の垂直分布(休耕地)時間的变化

調査深度 時間	0~5	5~10	10~20	20~30	30~40	Total
8~9	27 (82%)	4 (12%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	33
11~12	19 (68%)	6 (21%)	1 (4%)	2 (7%)	0 (0%)	28
14~15	1 (47%)	15 (44%)	2 (6%)	1 (3%)	0 (0%)	34
17~18	16 (57%)	10 (36%)	1 (4%)	1 (4%)	0 (0%)	28

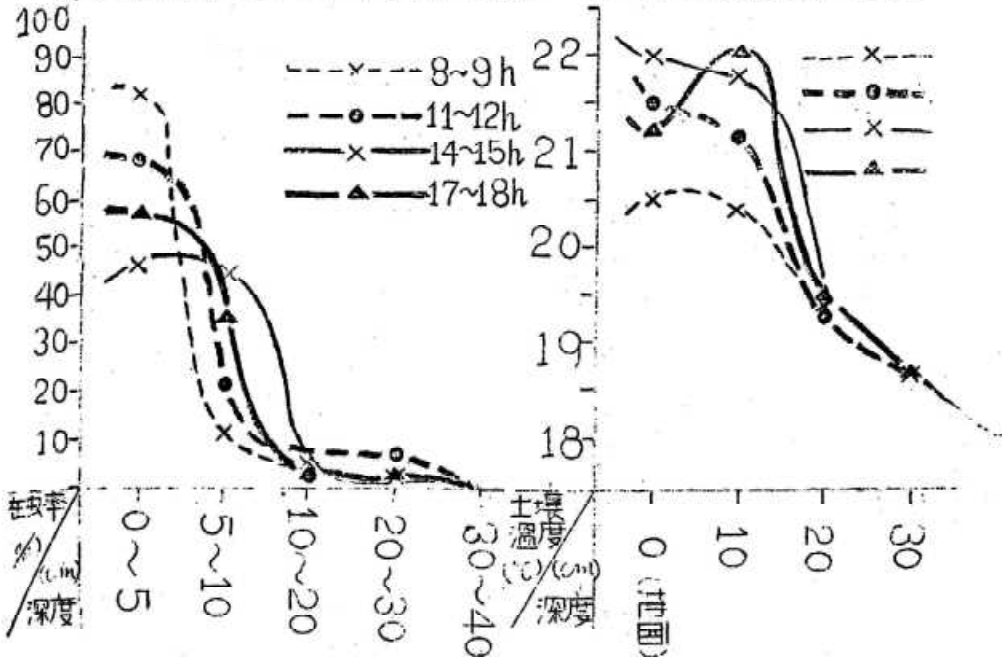
B) 土壤温度の変化

時間	深度 (cm)	0	10	20	30	40	湿度 (土15cm)
8.30		20.5	20.4	19.5	18.7	18.0	89%
11.30		21.5	21.1	19.3	18.7	18.0	67%
14.30		22.0	21.8	19.4	18.7	18.0	63%
17.30		21.2	22.0	19.5	18.7	18.0	70%

- 備考： 1) 掘取調査時刻は1時間とした。
 2) 温度調査は作業時刻の中間を調査した。
 3) 当日は曇天であった。

オ3図 根切虫の垂直分布と土壤温度との関係

A) 根切虫の垂直分布(時間的变化) B) 土壤温度の変化



オ3表及びオ3図より明瞭な如く土壤温度及び調査深度 10 cm, 20 cm と比較してみると根切虫の移動及び土壤温度との間には相似的な状態が見られる事がある。即ち土壤温度は深度 10 cm については時間的にかなりの変化がある事実であつて、10~20 cm 及び 20 cm 以下については土壤温度及びその状態にほとんど変化のない事実である。

更に重要な事実は 0~5, 5~10 cm の分布状態の変化は土壤温度、10 cm の変化との間に相当密接な逆の関係が力いておる事実である。

IV. 摘要

1) 年間を通じての根切虫垂直分布と加害時期との間には相当有力な関係がある事実が判明した。即ち、環境温度の季節的昇降と棲息深度の深浅は加害と直接の関係がある事実が見られ、こうした事から本虫の年間に於ける棲息、加害状態

10(83)

を大きく3つに分割する事が出来た。

2) 根切虫の活動期についてはそれぞれ)移動現象は環境温度との間に相当高い関係のある事案がつかれた。

3) 即ち、6月上旬の土壤温度から根切虫の垂直分布を推察すると早期の分布状態は地表近くにあり、温度上昇にしたがって次第に深部へもぐり、逆に温度下降によって分布は地表近くへ上昇の傾向を示す。

4) こうした結果から推して垂直分布の日週変化は環境温度の降昇と並行的に常に行なわれているものと考えられる。

5) 本虫が地表近く、即ち0~5 cm間に分布が上昇すると被害状態は非常に大きく表はれてくる。

引用文献

1) 葛野祐久、後田暢夫(1953): ヒメコガネ幼虫の発育と土壤温度との関係、応動、日本応用昆虫学会講演要旨 P. 5

2) 江崎悌三、野村健一(1941): 土壤昆虫の生態と防除

(1953. 7. 22 受)

ダイコンアブラムシ *Brevicoryne brassicae* L. の二三の生態に就いて

(日本昆虫学会中国支部第1回例会講演要旨)

鳥山竹志(岡大農学部植物害虫研究室)

河田和雄(全上)

I. 緒言

ダイコンアブラムシ *Brevicoryne brassicae* L. は十字科蔬菜中特にナタネに寄生しやすいと思われるアブラムシの一種であるが、その生態に関しては詳でない事が多いのでこれを明らかにするため1952年3月より野外観察及び実験室内飼育を行い、その生活環、繁殖力、生育速度等に関して調査したのでここにその大要を報告する。

II. 生活環及び増殖世代

本種の野外に於ける生活環は9月から翌年6月迄田場にナタネのある間はその嫩葉、成熟葉、及び花軸に多く見られる。7月より9月迄の間は、天敵(寄生蜂、及び、食蚜捕虫等)と気候要素(降雨及び、高温)により個体数を減じ7月中旬本種の姿は見られなかった。一方室内飼育による結果は、この間の繁殖はほぼ無性繁殖によるものであり、一年間に於ける世代数は約30であった。

オ 1 表

世代号	出生日	成化日	産子前日	産子最終日	死亡日	發育期間	成虫期間	産子期間	生存期間
1	31. III	15. IV	17. IV	—**	11. V	15	26	—	41
2	17. IV	30. IV	2. V	25. V	30. V	13	30	30	43
3	6. V	16. V	17. V	2. VI	3. VI	10	18	16	28
4	17. V	24. V	26. V	1. VI	3. VI	7	10	6	17
5	27. V	3. VI	4. VI	11. VI	—**	7	—	7	—
6	11. VI	9. VI	20. VI	24. VI	26. VI	8	7	4	15
7	20. VI	27. VI	28. VI	13. VII	15. VII	7	18	15	25
8	29. VI	6. VII	7. VII	16. VII	24. VII	7	18	9	25
9	7. VII	14. VII	15. VII	23. VII	26. VII	7	12	8	19
10	15. VII	24. VII	20. VII	—**	—**	9	—	—	—
11	29. VII	9. X	9. X*	27. X	7. XI	8	31	19	39
12	11. X	19. X	20. X	—**	30. XI	8	42	—	50
13	20. X	31. XI	1. XI	—**	10. XII	11	40	—	51
14	2. XI	11. XI	13. XI	17. XII	2. I	9	52	36	61
15	11. XI	25. XI	27. XI	26. XII	6. I	15	41	30	56

註. * 最初の産子虫が死亡したもの

** 途中事故で死亡したもの

III. 生育速度及び、繁殖力

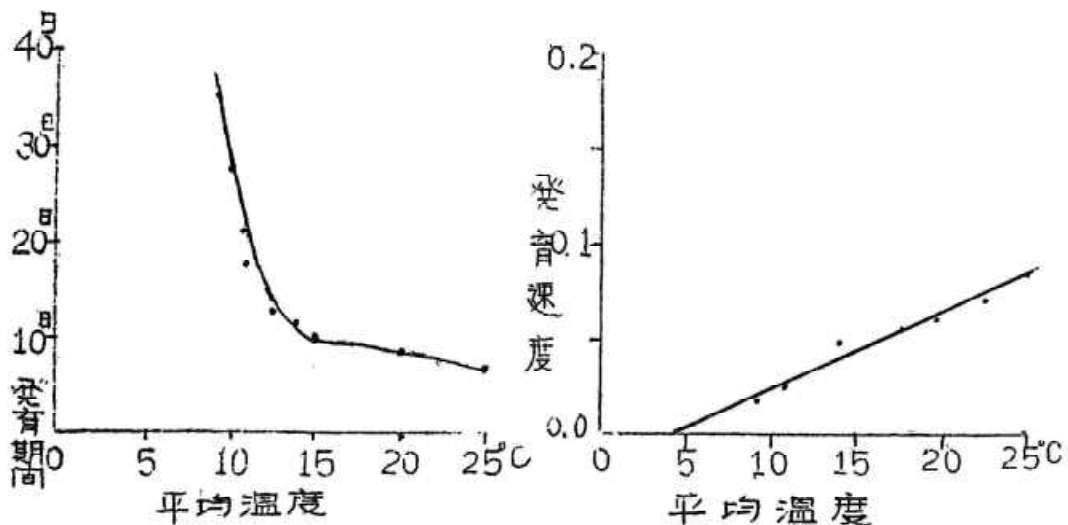
發育期間は胎気温の上昇と共に短縮する傾向があり、無翅胎生雌虫の飼育結果からの比較發育速度直線に據って、実験式 $y = 0.887x - 3.84$ を得た。yは比較發育速度、xは平均気温である。これより得た理論的發育零度は4.3℃、有効積算温度は112.6日度である。無翅胎生雌虫の産子前期間は平均、

12(85)

2. 1日、最高9日であり、産仔期間は平均18.2日、最高38日であり総産仔数は平均40.5匹、最高86匹であった。無産仔日数は平均3.2日、最高15日であり、産仔日の日平均仔数は平均3.2匹、最高5.1匹であり、1日の最高産仔数は9匹であった。又産仔後期間は平均3.7日、最高22日であった。これらと気温との関係を見て、所謂適温範囲は12°C乃至17°Cに至るまでにあり、この時期に於いて最もよく増殖し、酷暑期及び嚴冬期には個体数が減少する。寄生植物(ナタネ、ダイコン、カンラン、ハクサイ)の種類が異っても、発育日数、産仔期間、及び産仔数算には差があるとは認められなかった。猶本実験は主として無翅胎生雌虫を使ったので数少ない有翅胎生雌虫を扱った結果から結論をだすのは危険であるが産仔期間及び産仔数は有翅型は無翅型に比して著しく数値が小さい。従って本アブラムシの繁殖力の主因は無翅型にあるものと思われる。

オ 1 図

オ 2 図



IV. 概 括

この実験は無翅型が主であったので有翅型との比較が不完全であったこと、野外に於ける越冬の状態及び、北海道や、カリホルニアで見られる如き雄虫の出現が観察出来なかったことなどが今後に残された問題である。

(1953. 8. 10 受)

広島市附近の蝶類

古市景一

I 緒言

広島市附近の蝶については現在まで若干の新吉があるが、他地方のそれにくらべると本地方の蝶類についての資料は大へん少いと云わねばならない。

著者は本地方の蝶類に興味を持ち 1951年4月、広島大学入学以来現在までの三年間、広島市附近の蝶類について若干調査して来ている。本地方の蝶類はその地理的・緯度的関係からかなり複雑な蝶相を呈し、現在まででもかなり特異な種が分布することが知られている。著者は機会ながら本地方の蝶類について現在まで調査し判明したものと中間的のものを見た。とは云え調査不十分で、特に山吹の *Zephyrus* 属についてはほとんど意見を持たない等、不備の多いものがあるがこの点は今後の調査によっておぎないたいと思っている。

なほ、この小文を草するに際し、標本、資料等を多数心よく提供された御協力を下さった藤本隆光氏、本地方に於けるホジミスジについて御知らせ下さった広瀬義男氏に深く感謝する次第である。

II 本地方の概観

まず広島市近郊の区分であるが、これは広島市を中心とし、これをとりかこむ山地系、即ち安芸郡の一部(白木山 890m 戸山村)、佐伯郡の一部(極楽寺山 661m 井口村、八幡村、甘日市町、宮島町—^{みせん} 弥山 530m を含む等)を主として市の北西部とした。なほ、市東方の安芸郡の調査はまだ不十分のため本々では一府除外した。本地方の地形は概観的に関知が如く、広島市は太田川河口の *typical* な扇状地の上に位置し、市の後方には花崗岩盤の山塊をひかえ、海岸線に沿ってだいたい500m級の山が位置している。平地は少く山地のすそより急激に広まっている。市内には比治山、江波山、双葉山、向守岳等の丘陵状の山があり、又市東南部の海岸近くには仁保山がある。一方気候的には瀬戸内海地方特有の温暖な気候で雨量も少ない。月別平均降水量は広島では梅雨期と9月の降を尋く8月及冬期が少く、範囲は最低気温を承りたは1月で -0.3°C 、最高気温は8月で 31.5°C である。なほ、参考の故に次に広島地方の月別平均気

温、最高、最低気温、平均湿度：降水量を示しておこう。

表I 表・ 広島地方の気温・湿度・降水量
(広島气象台調査)

気温 = C° 湿度 = % 降水量 = mm

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平均気温	3.8	4.2	7.4	12.7	17.2	21.4	25.6	26.8	22.9	16.7	11.7	6.2
最高気温	8.8	9.3	12.6	18.0	22.3	25.6	29.7	31.5	27.7	22.5	16.9	11.4
最低気温	-0.3	-0.1	2.4	7.4	12.1	17.4	22.0	22.8	18.8	11.8	6.1	1.8
平均湿度	72.0	70.3	70.8	72.3	73.6	78.4	79.7	76.7	77.2	74.3	74.8	73.5
降水総量	46.5	64.2	106.2	159.3	146.5	245.8	222.3	110.7	193.9	112.5	63.5	53.2

植物相はかなり複雑であるが、主として滴葉樹であり特に極楽寺山、日木山、等の山麓及び周辺の山地はクヌギ、コナラ等の *Quercus* 属の植物が多く、昆虫類の生棲に絶好の環境をなしている。しかし宮島(瀟山)、極楽寺本山はスギ、カマ等の針葉樹が多く、蝶類の生棲にはあまりよい環境とは云えない。

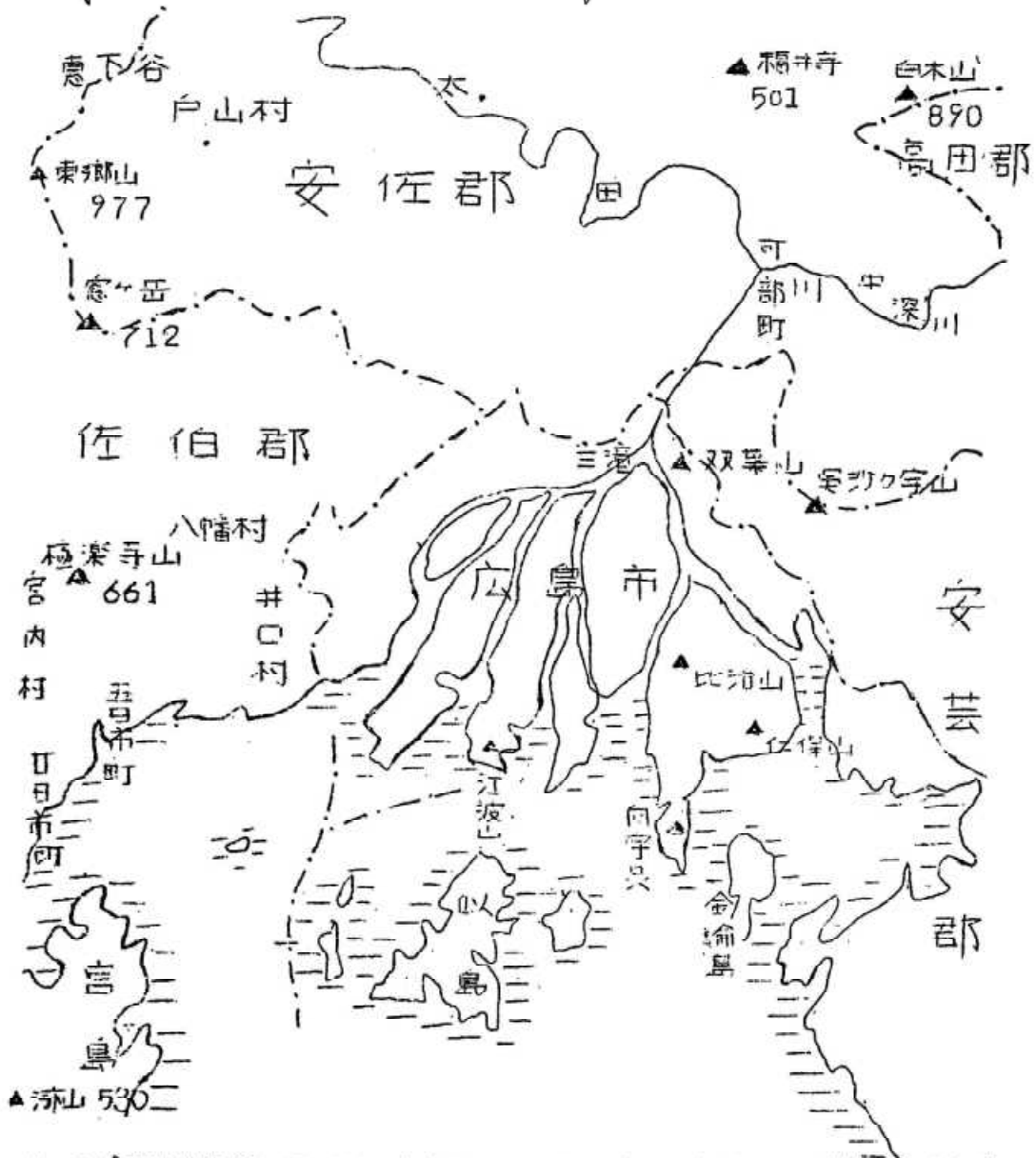
一方市内の向宇品はツブラジイ、クスノキ、クロキ、モチノキ、ヒメユズリハ等を dominant とする疎帯林でその昆虫相は南方的変異が濃く興味がある。

III. 本地方の蝶類

広島市附近の蝶類はその地形的な関係からか、かなり複雑で山麓性の種が海岸近くまで相当進出して来ているのが特に目につく。例えば、トラフジミについては、筆者の郷里の岡山県児島郡地方では全然見かけた事はないが、本地方では海岸に面した甘日市町、五日市町、市内双葉山、向宇品等において採集されており、極楽寺山にはトラフジミの大発生をする場所がある。本地方中最も多くの種類を産する白木山においても、ウラギンスジヒョウモン、イチモンジチョウ、サカハチチョウ、クロヒカゲ、オナガアゲハ、カラスアゲハ、アオバセセリ、ダイミョウセセリ、ヒメキマダラセセリ、コチャバネセセリ等の山地性の蝶が主である。更に極楽寺山は本地方におけるギフチョウの多産地で3月下旬～4月中旬にかけて相当個体量られる。市内向宇品は本地方中での特異な存在で南方系変異が濃く、クロコノマチョウ2種が藤本君によって得られており、筆者は昨年5月当地でサツマシジミを採集、その後の調査によって本種は当地に相当数発生していることが判った。今年になっても20頭近く得ており、採集個体以

(次頁下段へ)

◀ 広島市近郊略図 ▶



外にまた相当数目撃している。向字品にはこの他、本地方の他地域ではまだ採集していないホソバセリ、チマバネセリを普通に産し、蝶以外ではオオゴキブリ、オオキンガメの群集等も見られ、暖地帯のものが相当分布することは裏に興味深い。又宮島は島と云う *isolate* された環境にあるためか、種変異、個体数

16(89)

天(川)が、ウラキンシジミ、サツマシジミ等特異な蝶の採集されていることは面白いと思う。現在まで採集され同定されているものは次の表及び終りの目録がかけた如く8科69種である。この中には1頭或いは2頭しか採集されてなく、本地方に生得するや否や不確実なものもあるが、これは今後の調査に待つことにし、今回は記録のあるものを一応のせて。

表Ⅱ 広島市附近の蝶の種類数

Family	種類数	本地方で比較的少ない種
1. Hesperidae セセリチョウ科	10	ダイミョウセセリ、ヒメキマダラセセリ(白木山)、アオバセセリ、コナヤシセセリ(白木山)、ナマハセセリ、ホソバセセリ(向宇品)
2. Papilionidae アゲハチョウ科	9	ギフチョウ(極楽寺山、白木山、長砂山、宇山)、オナガアゲハ、カラスアゲハ(白木山)、モンキアゲハ(極楽寺山、市内、白木山)
3. Pieridae シロチョウ科	7	ツマグロキナオウ(佐伯郡井口村)、スジボンマキナオウ(白木山)
4. Lycaenidae シジミナオウ科	16	ムラゲキツバメ(佐伯郡八幡村、白木山)、ウラキンシジミ(宝町)、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミスイロオナガシジミ(白木山)
5. Libytheidae テングチョウ科	1	(テングナオウ 向宇品を 除く各地に普通)
6. Danaidae マダラチョウ科	1	アサギマダラ(極楽寺山、向宇品)
7. Nymphalidae タテハチョウ科	17	ウラキンスジヒョウセン、サカハチナオウ、イチモンジナオウ(白木山)、クモガタヒョウモン(井口村)、キタテハ(廿日市町)、ホシムスジ、アサマイトモンジ、スミナガシ
8. Salpidae ジマノメナオウ科	8	クロヒカゲ(白木山)、ユノマナオウ秋型2頭(向宇品)
計	69	

上の表が本所の種類数であるが、こゝには決して多いと云えるものではなく、今後の調査ではまだまだ追加されることゝ思う。掃く所の Zephyrus 類については、オオミドリシジミ、ウラナミアカシジミ、アカシジミ、ミスイロオナガシジミ、ウラキンシジミの記載がある他はほとんど知られてなく、この内でもオオミドリシジミ、ミスイロオナガシジミ、ウラキンシジミの記録は、標本を1頭しかなく確実に産するや否やは再調査を要する、更に面白いことはウラキンシジミを除く、ウラナミアカ、アカシジミ、オオミドリ、ミスイロオナガ等の蝶

は岡山米作部の見島野、爲敷地方では普通に産するにもかかわらず、本地方では相当な山地である白木山まで行かぬと産出せず、しかも個体数が極めて少いととである。この種なことが本地方における *Ephyrus* 類の記録がほとんど一つの原因であろうと思われる。しかし、本地方の植物相や環境とにらみあわせて見て、この類の生棲はほとんど確実と見られるので今後の調査に期待がかけられる。更に岡山南部には極めて普通の *メスグロヒョウモン* の記録がないのも調査不十分の爲であろう。尚、本地方における個体数が少ない、しつやる珍蝶? に属するものは先にオビ系にもかかげたが、アオバセセリ、ヒメキマダラセセリ、モンキアゲハスジボンヤマキチョウ、ツマグロキチョウ、ムラサキツバメ、ウラギンシジミ、オオミドリシジミ、ミズイロオナガシジミ、アサギマダラ、ウラギンシジヒョウモン、クモガタヒョウモン、キタアハ、アサマイナセセリ、スミナガラ、コノマナチョウ(クロコノマナチョウ) 等が、本州の他地方には産しないものとしてはサツマシジミがある。

以上だいたい広島附近の蝶類についてのあらましを述べたが、周年経過、食草等の調査も若干行っている。しかし現存する資料が少な過ぎる程度にまで達してないためこの問題は後日にゆずる。ただ、本地方の蝶類がかなり複雑で、特に山地性の蝶が海岸近くまで進出して来ているのはその地形的関係からであろうと思われるが、もっとより深く環境因子を解析して見なければ何とも云えず、早急に結論を出すのは危険であろう。更に南方的要素としての向宇品については、緯度的関係もあるが、山林がすぐ近くに港があるので、船によって運ばれ、それが当地に環境と食草を得て住みついたのではないかと云う藤本君の見解がある程度正しいのではないかと考えている。それから今後の調査によって発見可能な蝶は、ミヤマカラスアゲハ、ウスイロオナガシジミ、ジョウザンミドリシジミ、ミドリシジミ、コイシシジミ、オオヒカゲ等である。

最後に本地方の蝶類目録をかかげておこう。

広島市附近産蝶類目録

I. HESPERIIDAE セセリチョウ科 10 spp.

1. *Erynnis montanus* BREMER ミヤマセセリ
各地に春季普通に見られる。
2. *Daimio lethys* Ménétrières ダイミョウセセリ

18(91)

山地性で現在までの採集地。白木山, 戸山村, 不明峠。

3. *Choaspes benjaminii japonica* MURRAY アオバセセリ
1頭採集されたのみ。白木山(1942・V・20, 池田久雄氏)
4. *Isoternon lamprospilus* FELDER et FELDER ホソバセセリ 採集地。同宇品, 当地には普通にみられる。
5. *Ochlodes ochracea rikuchina* BUTLER ヒメキマダラセセリ。山地性で多い。白木山, 戸山村。
6. *Potanthus confucius flava* MURRAY キマダラセセリ
白木山。同宇品, 江波山。個体数少し。
7. *Halpe veria* MURRAY コチャハネセセリ
1949・V・29 白木山にて藤本君一頭採集。
8. *Polytremis pellucida* MURRAY オオチャハネセセリ
(ハナセセリ) 7月頃山地に多い。
9. *Polopidus mathias oberthüri* EVANS チャハネセセリ 同宇品。6-VI-1952 古市採集。
10. *Parnara gutatta* BREMER et GREY イチモンジセセリ
各地に普通

II. PAPILIONIDAE アゲハナヨウ科 9 spp.

11. *Lobelia japonica* LERCH ギフチヨウ
本地方では極楽寺山に多産するがその他、白木山, 中深川, 尾沙々宇山, 尾市北方灰ヶ峰, 尾東方野路山等でも得られている。
12. *Maneloides alpinus* KLUG ジヤコフアゲハ
本地方では山地性で白木山, 極楽寺山に多産する。
13. *Graphium sarpedon nipponicum* FRUHSTONFER アオスジアゲハ 各地に産するが特に市内同宇品に多産する。
14. *Papilio machaon hippocrates* FELDER et FELDER
キアゲハ 各地に普通だがナミアゲハより山地性で多い。
15. *P. xuthus* LINNE アゲハ(ナミアゲハ)
各地に最も普通
16. *P. macilentus* JANSON オナガアゲハ
本地方では山地に産し少ない。但し、白木山には比較的多産する。

17. *P. proteutor dewetzius* CRAMER クロアゲハ
各地に普通だが、個体数はアゲハ程多くない。
18. *P. helemus nicconicolens* BUTLER モンキアゲハ
個体数は非常に少ないが、極楽寺山附近では8月中～下旬にかけて確実に採集出来る。筆者は市内13果山での2回程目撃した。
19. *P. bianor dehaanii* FELDER et FELDER カラスアゲハ
山地性で多いが白木山麓では割に多い。

III. PIERIDAE シロチヨウ科 7 spp.

20. *Euremia hecabe mandorina* DE L'ORZA キチヨウ
各地に普通。
21. *E. laeta bethesba* JANSON ツマグロキチヨウ
限られた地域に発生するのみ。現在までの筆者の知見では佐伯郡井口村があるだけである。
22. *Gonepteryx meliboea nipponica* VERITY スジボソ
ヤマキチヨウ 秋本ノギクの花に飛来すると云われる(石原保先生記、新昆虫)
23. *Golias hyale poliographus* MÖTSCHULSKY モンキチ
ヨウ 各地に普通
24. *Anthracaris scolymus* BUTLER ツマキチヨウ
山地性であるが同宇品、双葉山等に産す。個体数はあまり多くない。
25. *Pieris rapae crucivora* BOISDUVAL モンシロチヨウ
26. *P. malela* MÉNÉTRIÈRE スジグロシロチヨウ
以上は豫定各地に普通。

IV. LYCAENIDAE シジミチヨウ科 16 spp.

27. *Greta acuta paracuta* DE MICÉVILLE ウラギンシジミ
各地に産するが、白木山麓には7・9月に特に多産する。
28. *Archopala japonica* MURRAY ムラサキシジミ
各地のクマキ林に普通
29. *A. bazalus turbata* BUTLER ムラサキツバメ
佐伯郡八幡村、白木山で各1頭づつ記録があるのみである。
30. *Corsana ibara* BUTLER ウラギンシジミ
佐伯郡宮島町赤山にて1949, VI, 26, 藤本吾により1頭採集された。

20(93)

本地方の他の地域では記録がなく、寧ろどうかどうか今後調査には
なれぬが、島である当地で本種の発生したことは非常に興味深い。

31. *Japanica lutea* HEWITSON アカシジミ

本地方では非常に少なく近年まで本種の産地は知られていなかった
が、白木山麓のクヌギ林で発生していたことが知られた。しかし個体数は
ウラナミアカに較べると断然少ない。

32. *J. saepestrigata* HEWITSON ウラナミアカシジミ

山地性で多いが白木山麓の *Quercus* 林に比較的産する。戸山村にも
産する。

33. *Antigius attilia* BREMER ミスイロオナガシジミ

本地方では極めて少く白木山で1頭得られたのみ

34. *Favonius orientalis* MURRY オオミドリシジミ

白木山麓で池田内により1頭得られたのみで産するか否かは再調査を要す
る。市内双葉山の採集記録があるが標本はまだ採していない。

35. *Rapala arata* BREMER トラフシジミ

本地方では本種は各地に普通で、特に極楽寺山麓には本種の大発生地が
ある。現在までの採集地、極楽寺山、白木山及その山麓附近、奥津々守山麓
市内双葉山、三滝、向宇品等である

36. *Ahlbergia ferrea* BUTLER コツバ

本地方では各地に見られるが個体数は多い。市内牛田町、極楽寺山、白木
山、宮島。

37. *Lycaena phlaeas daimio* SEITZ ベニシジミ

38. *Lampides boeticus* LINNÉ ウラナミシジミ

39. *Zizeeria maha argia* MENÉTRIÈS ヤマトシジミ

40. *Celastrina argiolus ladonides* DE L'ORZA ルリシ
ジミ 以上4種各地に普通

41. *C. albicaerulea* MOORE サツマシジミ

宮島西南部、向宇品、後者では全地域に分布し普通。現在まで20頭近く
得ている(総計)、他にも多数の個体が見られ当地に産していることは確
実である。ただ現在の調査にかかわらず、egg, larva, pupa ใด
ずれも未発見であるのが気になる。クロヤには被害された跡はほとんど
見られない。しかし、これはどうにかして解決したいと考えている。

42. *Everes argyalea seitzii* Wnukowsky ツバキシジミ
各地に極めて普通

V. LIBYTHEIDAE テングチヨウ科 1 Spp.

43. *Libythea celtis celtoides* FRUHSTORFER テングチヨウ
個体数ばかりが各地に普通。但し、向字品ではまだ採集していない。

VI. DANAIDAE マダラチヨウ科 1 Spp.

44. *Caduga lybia nipponica* MOORE アサギマダラ
本種は本地方では稀であるが、和楽寺山麓においでばかりが産するらしく
標本もある。筆者は1子を向字品で1953・V・15に得たが、其後採集
していないので偶然種と思われる。

VII. NYMPHALIDAE タテハオヨウ科 17 SPP.

45. *Argynnis cyllippe pallenscens* BUTLER ウラギンヒョウモン
山地に普通に産する。
46. *A. laodice japonica* MÉNÉTRIÈS ウラギンシジヒョウモン
白木山、戸山村等がりの山地では普通に見られる
47. *A. anadyomene mides* BUTLER ツモガタヒョウモン
佐伯郡井口村で1948・V・29 藤本君採集の記録があるだけで他の知見
にはまだ度していない。
48. *A. hyperbius* LINNÉ ツマクロヒョウモン
5~6月頃各地に極めて普通。
49. *Limenitis camilla japonica* MÉNÉTRIÈS イチモンジチヨウ
白木山、観音山、戸山村、水内村等の山地の各地に産する。
50. *L. glorifica* FRUHSTORFER アサマイチモンジ
筆者が藤本君の標本中より見出したもので、採集地は安直郡戸山村。194
8・VIII・10採集のもの。該地にはかなり産するのではなからうかと思われ
る。本種については再調査したいと思っている。
51. *Neptis aceris passerculus* FRUHSTORFER コミスジ
各地の山林に見られ4~5月頃極めて普通。
52. *N. pryri* BUTLER ホシミスジ
本種については広瀬勲氏が告知らせ下さったもので、佐伯郡日田市、市

22 (95)

内古田町の記録がある。

53. *Aruschnia burejana strigosa* BUTLER サカハチナヨウ
愚下谷, 白木山麓等の山地の渓流沿いの林中にすく。4~5月。7~8
月の年2回発生の種である。
54. *Polygonia c-aureum* LINNÉ キタテハ
本地方においては, 本種の食草のアサ, カナムグラが殆んど無いので, 本
種は極めて少い。甘日市附近にわずかに産するのみである。
55. *Kaniska caucase no-japonicum* VON SIEBOLD ルリタ
テハ
56. *Nymphalis xanthomelas japonica* STICHEL ヒオドリク
ヨウ 以上2種市周辺の山地に普通。
57. *Vanessa cardui* LINNÉ ヒメアカタテハ
市内各地に極めて普通。
58. *V. indica* HERBST アカタテハ
各地に普通なるヒメアカタテハに較べて個体数が多い。
59. *Dichorragia nesimachus nesitotes* FRUHSTORFER
スミナガシ 極めて稀であるが市周辺に生棲しているらしく, 市内の更興村神社
には昨年(1952年8月)に採集された標本がある。更に市内矢野町で
とらえられた記録があり, 極楽寺山でも目撃の記録があるので今後の調
査により明らかになるものと思う。
60. *Apostura ilia subsignata* BUTLER コムラサキ
本種はかなりの種で, 普通戸山村, 白木山附近に産するが, 番号は195
3. VI. 15 市内富実町広大教養部家庭で本種を目撃した。
61. *Hestina japonica* FELDER et FELDER ゴマダラナヨウ
市内及市周辺のエノキに普通に発生している。市内での採集記録は江波山
に保山, 向字品等である。

VIII. SATYRIDAE ジヤノメチヨウ科: 8 spp:

62. *Ypthima argus* BUTLER ヒメウラナミジヤノメ
各地に極めて普通
63. *Satyrus dryas bipunctatus* MOTSCHULSKY ジヤノメチ
ヨウ 7~8月頃山地に普通に産する。

64. *Lethe sicelis* HEWITSON ヒカゲナヨウ
各地の林中に普通。
65. *L. diana* BUTLER フロヒカゲ
山地性で白木山麓附近では5月頃普通に見られる。
66. *Neope gashkevitschii* MENÉTRIÈS キマダラヒカゲ
各地に普通、市内では三滝町、府中町、向宇品?の記録がある。
67. *Mycalesis gotama fulginia* FRUHSTORFER ヒメジヤノメ
68. *M. francisca perdiccas* HEWITSON コジヤノメ
上記2種は各地に普通、両者の比は大体同程度であるが、コジヤノメの方がややよく眠りつく株である。
69. *Melanitis phedima vitensis* MATSUMURA コノマチヨウ(フロコノマチヨウ) 秋型♀2頭。本種は1949・V・8 藤本君によって向宇品で得られたもので、やや古びているが完全な個体である。2頭だけいた同一場所で採集されたようで、某後何回採集を行っての採集出来たかを見ると偶然種かと思われるが、とにかく向宇品においてかかる南支系の蝶が度々得られることは珍しいと思う。標本は藤本君が蔵しておられる。更に、かつて広島県で夏休みの課題として昆虫標本の呈出をされた時、本種が2頭言われていた由で、市周辺で採集されたことはほとんど間違いない。この標本も藤本君が蔵しておられ、相当破損しているが本種に向違いない。本種も今後の調査によって確実な発生地が発見出来るのではないかと期待している。

— 以上 —

(註) 過去に記録があるものは一応収録した。尚、同定学名は日本昆虫図誌及江崎・白水画先生の“日本の蝶”によった。

◇参考文献 南大◇

- 1) 中四国のお好採集地(中国地方) 石原 保(新昆虫 Vol. 1 No. 3, 1948)
- 2) 広島市附近の昆虫について 藤村俊彦(新昆虫 Vol. 3, No. 7/8, 1950)
- 3) 広島近郊における昆虫目録 藤本博光(広島縣城高夜生物班会誌)
- 4) 広島県産昆虫目録 池田久雄(中国生物同好会機関誌 B・Z No. 6, 7, 1948)
- 5) サツマジジミ安芸宮島に産す 小黒善雄(Zephyrus Vol. 5, No. 2/3, 1934)
- 6) 日本昆虫図鑑 (1952)
- 7) 日本の蝶 江崎梯三・白水隆(新昆虫 Vol. 4 No. 9, 1951)

(広島大学教育学部生物学科) — 1953. 7. 17 発 —

セミノタカラダニの寄生に 関する一調査(オ1報)*

広瀬義躬

I 緒言

蝉類の成虫の天敵として記録されているものは数多くあるが、その内外部寄生するもの、一つとしてセミノタカラダニ *Loptes* sp. がある。これは幼虫時代を蟬の体に寄生しているもので、体全体紅色、楕圓状、体の前端に尖った口を有し3対の足を持つダニの1種であるが、成虫ほどのようなものが未だわかっていない。又蟬の体に寄生する経路も今迄不明とされていたが、最近橋本(1952)によってその経路が一部判明した。

筆者は本年(1953)徳敷市鏡形山に於てアブラゼミ、ツクツクボウシ、ニイニゼミの3種についてその寄生率、寄生部位等1, 2調査することを得たのでここに報告したい。但、調査時期が丁度蟬の発生の末期に当たっていたため、材料には♀が多く、♂が少く、又ツクツクボウシは♀、ニイニゼミは♀1頭を採集したのみであって材料不足のせしりは免がれない次第で、従つて本稿では比較的多くの頭数を採集することの出来たアブラゼミを主として論を述べてみたい。

II 調査方法

調査は1953年8月20及23日の2回に亘つて行ひ、オ1回はアブラゼミのみについてその寄生率を調査した。オ2回はアブラゼミ、ツクツクボウシ、ニイニゼミの3種を対象とし各種についてその寄生率及寄生部位を調査した。寄生部位は蟬の体を頭部、前胸部、中胸部、後胸部、腹部、脚部と6区分し後胸部、脚部以外を又背面、下面と各々2区分、脚部は前肢、中肢、後肢と3区分して各部に寄生するダニの数を記録した。後胸部は対象とした3種の蟬に於ては、背面は中背面に隠れて外部からは見えないので、下面のみ記録をとつた。

なお、上記各部位以外としては翅部があるが、この部位への寄生は殆んど考えられず、♀1頭を採集してその存在を認めたが、これは調査の際後胸部(下面)からの移行と考へられるので後胸部(下面)寄生のものとして処理した。

III. 調査結果及び考察

1.) 寄生率 : 先ずアブラゼミについて行ったオ1回の調査結果はオ1表に示す如く寄生率 77.1%, オ2回の調査ではオ2表に示す如く 85.2% と 80% 前後のかなりな高率を示している。

オ1表. ヒミノタカラダニの寄生率
オ1回調査 (アブラゼミ)

	寄生	非寄生	計
♂	9	1	10
♀	13	7	25
計	27	8	35
寄生率 (%)	77.1	22.9	100

オ2表. セミノタカラダニの寄生率
オ2回調査 (アブラゼミ)

	寄生	非寄生	計
♂	7	2	9
♀	16	2	18
計	23	4	27
寄生率 (%)	85.2	14.8	100

ツクツクボウシは1頭中3頭に寄生が認められたが何分この数が少ないので向極とするに至らない。又1頭を採して寄生が認められたヒニヒゼミに於いては同様である。アブラゼミに於いて、ヒクラシに対するヒクラシヤドリバエの初生性別による寄生率の大小はオ1・2表より算出してと存在するとは考えられない。

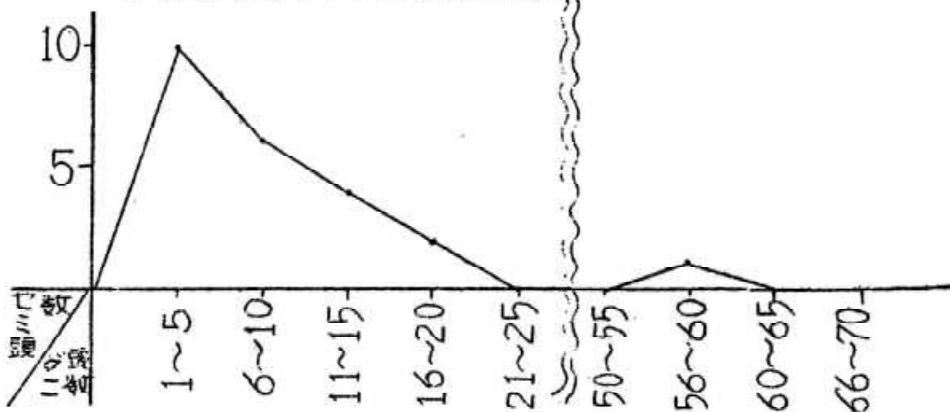
又橋本(1952)の述べた如く蟬が産卵に止まっている際に樹から蟬の体にダニが移行するのであれば、羽化後の日数を経て蟬ほど寄生の度合が大であり、新鮮な蟬ほど寄生の度合が小さいのと一応考えられるが、実際野外に於ては、ダニは各樹木に一杯に分散しておらず多少に集中的傾向があるものと考えられ、事実筆者の調査結果ではその寄生の有無、又は寄生ダニ数の多少は蟬の個体の新鮮度には関係しないとの事である。

2.) 寄生虫数 : オ2回の調査に於て寄生が認められたアブラゼミ23頭に寄生したダニの数は総計220頭で、アブラゼミ1頭当り平均9.5頭のダニが寄生していることになる。ツクツクボウシに於ては、寄生発見の3頭に寄生したダニ数は9頭であり、ツクツクボウシ1頭当り平均3頭のダニが寄生していることになる。そして寄生ダニ数の1頭のアブラゼミに於ける最多は57頭、最少1頭ツクツクボウシでは最多5頭、最少2頭である。

しかしアブラゼミに於ける最多57頭は寄生したダニの数を1~5, 6~10

11～15, 16～20……の各段階に分ち管理したオ1図より見て、オの例外的な点のと思われ、上記の如く算出した1匹当り平均9.5頭はこの57頭の1例を含めているので、これを除いた残り163頭のダニが22頭のアブラゼミに対して寄生する割合を算出してオアブラゼミ1頭当り平均ダニ7.4頭となり1頭当りの寄生ダニ数がツクツクボウシに比して多しことが知られる。

オ1図 アブラゼミの寄生ダニ数



たとえアブラゼミとツクツクボウシにその寄生ダニ数の差が見られなくても他種に於て比較すると、必ず種によって寄生ダニ数に差が見られると思われ、それはその種の棲息環境及嗜好樹木の別によって差が生ずると考えられる。即ち、橋本(1952)はカナメエナ、ミズキ、シイには殆んどダニの存在が認められるもののヒマラヤスギ、フウリンウメモドキではその樹表の処々にダニの附着、若しくは歩行が認められたと記している。これだけでは、はっきり云えないかも知れないが、前項に於て述べた如く、自然状態に於てダニはその棲息に適した環境に生活すると思われ、各樹木には一様に分散することなく、かえて特定の樹木に集中化する傾向があるのではなしかと考えられるからである。本調査ではあまりに調査個体数(セミ)が少いためにアブラゼミとツクツクボウシを充分比較することが出来ないのは残念だが、今後各種についての調査を進める内はっきりして来るものと思う。この事実は各種の寄生ダニ数のみならず、前項寄生率についても当然考えられるところである。

3) 寄生部位：アブラゼミに於て調査した寄生部位について各部位寄生ダニ数及びその割合をオ3表に示す。これによってわかるとおり最も寄生率の高い部位は胸部下面であり、脚部後面は寄生なく、前胸部背面や中腹等は低率を示している。

そこで次にオヨ表から蟬の体について、背面と下面との寄生率を調べてみると、背面42頭→19.1%、下面178頭→80.9%で下面に絶対的に多い事実を示す。

オヨ表 セミノタカラダニの寄生
部位(アブラゼミ)

寄生部位	寄生ダニ数	割合(%)
頭部(背面)	12	5.5
(下面)	8	3.6
前胸部(背側)	4	1.8
(下側)	66	30.0
中胸部(背側)	8	3.6
(下側)	37	16.8
後胸部(下側)	29	13.2
腹部(背側)	18	8.2
(下側)	14	6.4
脚部(前肢)	18	8.2
(中側)	6	2.7
(後側)	0	0
計	220	100.0

次に蟬体の前方部(頭部、前胸部、中胸部、前肢、中肢を含む)と後方部(後胸部、腹部、後肢を含む)との寄生率を調べてみると、前方部159頭→72.3%、後方部61頭→27.2%で前方部に多い事実を示している。

そこで更に前方部に於て、背面と下面とに於てその寄生率を調べると背面24頭→15.1%、下面135頭→84.9%で前方部下面にダニは集中的傾向を示していることが伺われる。

以上の諸表からアブラゼミに於ては前方部下面に寄生多く、特にオヨ表から最も明かな所に前胸部下面には最も寄生率が高い。上層に隠れたそ

の下部の凹所には特に寄生数多く、大体どの個体に於てもこの部位にはダニの寄生が認められた。

オヨツクソウボウでは中胸部(下面)2頭、腹部(背面)1頭、全(下面)1頭、脚部(前肢)2頭、全(後肢)3頭であり、ニイゼミでは1頭であるが、後胸部(下面)2頭、腹部(下面)1頭、脚部(後肢)1頭であった。

IV. 要 約

以上を要約すれば次の様である。

- 1) アブラゼミのセミノタカラダニ寄生率は77~85%、大体80%前後で高率を示す。
- 2) 寄生の有無、寄生ダニ数の多少はその個体の新鮮度には関係しないどの様である。
- 3) アブラゼミ1頭当りの寄生ダニ数は7.4~9.5頭であり、ツクソウボウ

28(101)

シでは僅か3頭でアブラゼミの多いことが伺われる。一般に蝉の各種に於て、寄生率及び寄生虫(ダニ)数に差が生じるとすれば、2)の理由を全稱であるが、それはその種の棲息環境及び嗜好樹木の別によるものと思われ、自然状態に於てはダニは一般に分散してゐて、か之つてやはり集中的傾向が見られるのではないかと、アブラゼミ1頭に対してダニ57頭等という1例から推される。

4) アブラゼミに於ける寄生部立ては下面は背面よりも寄生多く、前胸部よりは胸部より、胸部よりは腹部より、腹部よりは下部に寄生は集中的傾向を示し、前胸部下面に最も寄生が多い。

参 考 文 献

加藤 正世(1950):日本の蝉: 85.

橋本 治二(1952):セミ/タカラダニ *Leptus* sp. の寄生経路
新昆虫 5(6): 35

後記: 本調査に於ては調査個体(セミ)数が少なかつたこと、各型について広く行なかつたこと、ダニの寄生経路と云われる樹表にダニを発見出来なかつたこと等、不備な點は甚だ多く、未だ発表する段階でないものであるが、今後再調査する機会と近くないので、ここに査しい資料により記した。しかし、後日その日誌と各機会のあり次第更に広く精く調査したく考へており、本報告を第1報とした次第である。各委員氏の御教示を切に御願ひして御筆したい。

(谷敷市田之上 822)

磐瀬太郎氏よりホシミスジの卵・幼虫・蛹について

私は宛に本誌 Vol. 3 No. 6に「ホシミスジ覚之書」と題してホシミスジに關する知見を思ひ出すまゝに2・3記しましたが、その内 §2に磐瀬氏の記録を引用したことに対して、私宛に下記の如き御意見を磐瀬氏が寄せられ、本誌上に掲載してほしいとの由です。ゆざゆざ御教示いただいた全氏に深く感謝し、ここにその御知らせ下さつた覚書の一部を引用して記させていただきます。

—(前略) 疑問とされた私のホシミスジ幼虫、蛹の中は、其の正確なる機会がありませんが、恐らく田淵行男氏の観察が全面的に正しく、若干の色彩の差を意見(?)の相違とすれば、貴兄の御観察の通りと思ひます。(後略) 26-VII 受
(広 環 記)



児島郡産の 昆虫数種

筆者は1947年より児島郡地方の昆虫の調査と採集を行って来ているが、現生まで採集した昆虫の内比較的少く、珍しいと思われる種を数種挙げておく。しかし、採集が限られた狭い範囲（主として郡内の尾原）であるため、今後の調査如何に、否、否は普通種に格下になるものもあるかと思われる。

1) *Ledra auditura* WALKER ミミツク 1947・VI・14 採集 1回 郷内村尾原。

本種は近くの山林のコナラの幹で採集したもので、以後採集したことが無い。

2) *Eucurysses grandis* THUNBERG オオキンカメムシ 1949・X・23 1♀, 1951・VI 1頭 (いずれも郷内村尾原にて

採集資料

採集。

本種を少くも上記の2頭採集したのみである。前者は1947年のヨモギの葉上で採集した。なお、本種は長友野邦雄君が天城で採集されたのを見つけたことがあるが、詳しい日付等は不明である。標本は天城高校生物部にあるはずである。

3) *Grophosoma rubralineatum* WESTWOOD アカスジカメムシ 1952・VII・16 1頭 郷内村尾原。

本種は伯耆大山には多産し、カラカサバネ村の花上に群集しているのが見られるが、筆者は本種を自宅の畠のバセリーの花上にて1頭採集した。その後は何も得ていない。

4) *Pseudoceroslesthes chrysothrix* BATES キマダラヤマ

30(103)

カミキリ 1947・VI・28 1頭
茅野君採集 藤戸町藤戸

本種は藤戸で茅野君が1頭ネムの枯枝にて得られた。標本は筆者が所蔵している。

5) *Purpuriceus lituratus risisemai* VILLALBA エボシカミキリ 採集月日不明、3~4頭
藤戸町藤戸、茅野君採集。

本種も茅野君が藤戸で3乃至4頭採集されたが、その後採集記録を見ない。標本は天城高校生物部に所蔵しているので詳しいDataは標本と共にあることと思ふ。

6) *Aphodius elegans* AL-LIBERT オオフタバシマグソコガネ 1948・VI・27 1頭 柳内村木見

本種は道路上の馬糞に飛来したものと見たき落して採集した。なお、本種は1950・V・14、岡山博物館野谷で神庭の滝へ採集に行つた際、やはり道路上の馬糞で1頭採集した。

7) *Anthracoptera rusicola* BURMEISTER アカマダラコガネ 1948・V・16 1頭;
1948・VII・16 1頭 柳内村尾原。

採集月日は違つが、いずれも同一の場所のクヌギの樹液で採集した。本種は、天城高校先輩、塚本雄氏と福田町浦田の山林で1頭得られており、調査

すは意外多くの個体が得られるかも知れない。

上記の他、センノキカミキリ、ネブトクワガタsp.他数種を採集しているが、同定していないものや、調査不充分のものもあるのでこれは後日にゆずる。

(古市景一)

— No. 218 —

タコラ山で採集した メダカカミキリの1種

昨年6月15日、児島郡のタコラ山に採集行を試みた際、beatingによつて採集し得た *Stenkomalus* sp. メダカカミキリの1種がある。本種は *Stenkomalus cleroides* BATES カツコウメダカカミキリに若干酷似するが、斑紋や外部形態上にかなりの相違が認められ、これとは種を異にするものと思われる。むしろ本種は新昆虫 Vol. 6, No. 7, p. 15. 梅谷敏二氏の“藤の枝幹部を侵害する甲虫類”文中藤村俊彦氏原因として掲載されている *Stenkomalus* sp. に極めて酷似するものである。(小野 洋)

— No. 219 —

熊山にヤコンオサムシ

去る4月26日小野洋氏他数氏が熊山へ採集に行かれた際の下記の記録及標本を御呈供下さいましたのでここに報告致します。

マコンオサムシ *Apulomopterus yacouinus* BATES.

IV-26, 1953 和気郡熊山
採集数3頭 採集者：小野洋
標本はこの内2頭を筆者保存。未筆
ながら小野洋氏に深謝の意を表します。

(友野良一)

—No. 220—

岡山より記録する ハンミョウ2種

本年下記に如きハンミョウ2種を岡
山市内で採集することが出来た。県南
部特に岡山市に於いてはいずれも最初
の記録と思われるのでここに報告した
い。

1) (*Eugraphia*) *elisae* Mo-
TSCHULSKY ヒメハンミョウ(エリ
ガハンミョウ)

2) (*Myriochile*) *specularis*
CHAUDOIR コハンミョウ

以上2種共、採集地：岡山市浜 採
集月日：VII-31, 1953

2種いずれも採集地には多数見られ
るが前者の方がやや多い。湿地を好み
殆んど飛翔しない。従ってその飛翔距
離は短い。

なおヒメハンミョウの方は筆者弟が
岡山市門田に於いて1頭の死体を採り
又いろいろいぼの名目撃してはいるが
確かでない。同定は小野洋氏にして
いただいた。未筆ながら感謝の意を表

する。

(広瀬義躬)

—No. 221—

伯耆大山のムツモン ミツギリゾウムシ

7月号に大山のミツギリゾウムシに
関して記したが、その後友野良一氏の
話によって若干記録されている事が判
明した。即ち、1951年7月25日頃、
伯耆大山の文珠堂より更に進んだとこ
ろで、友野良一氏が2個体と白神邸氏
が1個体採集されている。しかし標本
と報告しているのが現在種名は判然と
しない。

しかしながら本年7月28日、7月
号のそれと同じ場所、入山、白神邸近
で青野孝昭氏により *Pseudorychodes*
insignis LEWIS ムツモン
ミツギリゾウムシが1個体採集された
昨日(7月30日)訪ねた青野氏が
採集した2頭の標本がこれであって、筆
者が採集している。尚 *Beryrrhynchus*
poweri ROELUFS ミツ
ギリゾウムシについては従って未だ不
明である。(小野洋)

—No. 222—

伯耆大山のナガタマムシ 3種

1951年夏に伯耆大山で採集し得
たナガタマムシの中、次の如く3種(
いずれも大山では少くない)のである

32(105)

が、ミ一報報告しておく。

1) *Agriotes cyanouiger* SAUNDERS クロナガタマムシ

1951年6月23日 伯耆大山

2) *A. spinipennis* LEWIS ケマキナガタマムシ

1951年6月24日 伯耆大山

3) *Coraebus quadrinodulatus* METSCHULSKY シロオビナカボソタマムシ

1951年6月23日 伯耆大山
(小野 洋)

— No. 223 —

伯耆大山のベニヒラタムシ

本種 *Cucujus coccinatus* LEWIS の大山に於ける最初の記録は1951年6月22日、高谷榮平先生を中心としたグループで大山に採集行を試みた最初の日、大山寺部落のバス停留場から山の麓に至る山道に於いて、積み重ねてあった薪から白神節君の得た1個体があるが、本種は大山に於いてもあまり普通には見られないようなので、や、甚前に属するが、報告しておく。(小野 洋)

— No. 224 —

県南部より 記録する ハナノミ 2種

1) 釜山のウスイロヒメハナノミ;
1951年6月17日 岡山市北部の釜

山に採集を試みた際、*Mordellistena palliata* KUNO ツスイロヒメハナノミと混同されるものを採集しているので報告しておく。

2) タコラ山にキンオビハナノミ?
: 1952年6月15日、県南半島のタコラ山で採集を試みた際、*Mordella flavimana* MARSEUL キンオビハナノミにかなり似たハナノミE 1個体捕獲しているが、やや破壊しているためはっきりしない。今後の調査で明確にしたい。(小野 洋)

— No. 225 —

アサギマダラは上着しているか? — 総社町附近に於ける 記金衆 —

本種は総社附近では鶴形山あたりで2~3回の記録があるらしいが、一般に稀らしく、粟田・鶴山附近でも記録があるがこれも多くはない。しかも記録は殆んど秋ばかりなので、山地の気温の低下によって南部に追われるのではないかと思われる。土着しているかどうかは非常に疑問であった。しかし最近月日が不確実であるが、8月に総社町田町から1個体記録されているのを知った。又10月に入ってから奥部山で2個体目撃され(内1個体採集-別府-)。私の父も鶴形山で2個体目撃している。この採集に多くの記録があり、8月にも採集されている位であ

るから、アサギマダラの産地附近土管は殆んど発見せらるゝと思ふ。早速に私の知っている産地を調査してみよう。

○1951年9月23日 福山清音
例 2頭採集 (水野)

○1951年10月21日 福山山寺
例 1頭採集 福野 (水野)

○1952年8月 福山町田
例 1頭採集 完全新鮮 (川西)

○1952年10月4日 清音村経
部水の奥(舞部山北部) 1頭採集
完全新鮮 (別府)

○1952年10月5日 前向池
1頭目撃 (別府)

(以上1952年11月現在迄)
(水野弘造)

— No. 226 —

編者註) 上記報告に於いて水野氏はアサギマダラが当地に生息しているか否かは不明かと8月採集の記録により論じられておりますが、8月に記録されたからと云って生息しているとは断定出来ません。生息しているとすれば他の産地の如く6・7月頃記録されるべきではないでしょうか。6〜7月に本種のみられる泉下における南限は山口県徳山市の臥牛山では7月6日2頭目撃の記録があります。又気温等(関係だけではなく、古屋野寛氏によれば本種の産地たるガガイモ科のものは見られる)由ですから、この頃からその産否が論ぜられるべきであらう。

ミドリシジミの新産地

本誌9号南部に於いては既に本種而外限田、福山町徳島、福山町から知られているが、我が産地はニケガの産地を産地し得たのでここに報告する。

1. 徳島県内村本尾新産地

VII・26・1953 6♂♂ 1♀ 筆
採集、蔵。

2. 徳島県徳島市下河原町

VIII・16・1953 7♂♂♀♀ 筆
採集、蔵。

両産地と各個体数等々上記記録以外に目撃した個体数を少なくない。特に後産に於いては酷似種ヤマトシジミは時期が早いためか1頭採集しただけで本種のみが得られた。尚本種は傅れいば飛翔中に産地と区別出来、静止の際と翅の裏面が徐々に暗色を帯びる為判別し得る。

今後県内各地から産地が知られる事と思ふがミヤコグサ自生地のみ本種は必ず見出されると思う。

(安東瑞夫)

— No. 227 —

福山にミドリシジミ

本年(1953)6月24日、福山町から福山に採集に行つたところ、ミドリシジミ♀1頭を得たのでお知らせする。

34(107)

スの♀五頭よりおとこだったが、個体は
かなり新鮮なものであった。他にミス
イロオナガ、オオミドリ、ウラナミア
カも少くいたが、いずれも古いものだ
った。昨年黒田で本種を採ったのは7
月に入ってからだったが、これから考
えても本種の発生期はずいぶんおとし
ものだろう。なぶそこでイチモンジチ
ョウも見たし、昨年はムラサキツメ
らしいものを見たが採り残したのは残
念だった。(水野弘造)

— No. 228 —

小黒田のトビイロサシガメ

去る7月26日、夕俵になつかしの
小黒峠に足を向けた際、路傍でアカマ
ツの葉の向に死んでほさまっている本
種 *Oncoccephalus philippinus* L.
ETIENNY トビイロサシガメ 1♀を採
集した。稀種ではないが、本地方につ
いては未だ記録していないので一応報
告しておく。尚本個体は体長21mm
に達する大型の♀で小胸板は黒褐色を
呈する。(小野 洋)

— No. 229 —

生態観察資料

アオスジアゲハの — 経過 —

本種の通常の発生経過として夏発生
の成虫(夏型)によって産卵され成育

した蛹が越冬することがあって冬、
夏型成虫により春季産卵のものが一
群して、夏型として羽化せず、そのま
ま蛹態にて越冬、翌年羽化するという
とは異なり、しかし最近後述の如き異
常な経過を示した例が1・2報告され
ており、筆者も注意して観察していた
ところ、それらしい一例を知ることが
来たので参考までに報告する。

即ち、昨年(1952)5月自宅庭内
クスノキより卵を採集飼育し5月31
日、6月1日の両日に2頭の羽化を
見た。そして産卵になっておとこは
羽化することなく、その後10月に
おとこを放してその以後筆者の不
注意により放してしまった。10
月に思はず時を期何年変わった
ことなく鮮やかな緑色をして
いた。それ以来本年になって5
月24日室内にアオスジアゲハの
羽化後の極めて新鮮な個体が
産卵した。当時戸内をきき
て再び羽化した蛹2頭を羽化した
と云ふ室内のどこかにあることは
確かである。羽部から飛来する、
葉の裏には毒をう中は当然
昨年(1952)の2頭の蛹の内1
頭が羽化したものと推察される。
しかしながら夏型か、夏型か
いづれかはおぼろげに観察せ
ず放したものはウカツであ
ったが、夏型であろうと記憶
している。

他のアゲハ類に於いてもこのよ
うな異常な経過をとった例と
あるらしいが本種と極めて近
縁のミカドアゲハに於

では、この様な経過がいろいろ常態であることと考之ると非常に興味深く思われる。

：参 考 文 献：

1) 高橋昭 (1946)：蝶類生態雑録(I) 生態昆虫 1(1)：24—26

(巻型産卵のこの翌年4月まで生存、但し孵化せず)

2) 都筑守彦 (1948)：アオスジアゲハの異常経過，生態昆虫 2(6/7)：69

(巻型産卵のこの翌年5月初化、夏型の色彩領域と呈す)

(広瀬義躬)

— No. 230 —

今夏の初認数例

1) モンシロナキウ (於、広島)

1953年3月10日、広島市東千田町広大理学部正門の辺で1個を目撃、これが初認であった。標準初認日は3月14日頃からで、14日に市内豊町で2、皆楽町で3個を目撃、それから以後は感りにくい程度にみられた。

2) ニイニイゼミ

1953年7月8日、広島・白木山へ採集旅行へ行来、初めて鳴戸を聞く。市内では鳴戸(7月10日)するまで向かっていた。卵産後広島市東千田町では音聲に前かかっている。

3) アブラゼミ (尾島町(山内町尾島))

1953年7月12日、孵化したばかり

りの早に1頭採集、初認であった。其後13日含1頭、14日に含1頭を目撃。本宿町の鳴戸を聞いたのは15日であった。7月15日頃の標準初認日であろう。(古市景一)

4) ツクツクホウシ (於、豊後)

下記の如くに本年筆者の耳にした初鳴を報告しておく。鶴形山あたりでは更に以前からの産生があったかも知れない。

豊後市酒津 7月26日午前10時55分、特晴、(小野 洋)

5) シオカラトンボ (於、豊後)

1953年4月22日 豊後市田之上自宅庭内に於いてワサハトンボ1種と混雑する本種♀(俗称ムギワラトンボ)1頭を筆者が目撃した。これが本年の初認であって、今頃は4月下旬～5月上旬の産卵の出現期にあたる所である。(広瀬義躬)

— No. 231 —

コアオハナムグリの 早期出現

1953年4月8日、同山市後余園に於て産卵中の本種1個を採集した。現在(特に5月中旬頃)には本種を各種の花上に見かけることが多いが、4月上旬の記録は一寸早いほうに思ふ。

(広瀬義躬)

— No. 232 —

倉敷に於けるイカリエ ンガとその発生期に關 する疑問

従来文献においては、本種 *Pterodecta felderi* BREMER の記録はなかったが、筆者は1950年に1頭、1951年に2頭、倉敷市浅瀬町に於いて採集又は目撃している。正確な日付は密忘失してしまつたが、いづれも10月であつた。さて本種の発生期としては普通 4~5月、6~7月に亘つて2回出現するものとされてゐるようである(日本昆虫図鑑 p. 567 1951)。しかし筆者が採集した時期は上記の如く秋期10月で、個体を新鮮であつたことから、秋期に発生したものであることに向違ひないと思ふ。又本誌 Vol. 2 No. 6, 53~54 には水野弘道氏が、愛媛で4月にイカリエンガ多数を採集、目撃され、しかもその日は色どあせ、翅が多少痛んでいたので冬を越すのではなからうかと述べられてゐる。これら事実から考へて当地方では秋期に年3回の発生が行はれ、この期のそのが成虫態で越冬するのではなからうかと思ふ。しかし本種の発生期に關する文献を満足に見ていないし、10月以前に記録をなく確かなことは云へない。以上文献に於ける本種の分布を踏まると共に、その発生期について疑問を抱いたので一筆記した

次第である。諸君の御教示をお願ひする。(広瀬義躬)

— No. 233 —

シンジュサン楠の木 の葉を食す?

1953年6月18日、広島市東千田町の広島大彫理學部校庭でシンジュサン *Samia cynthia pryeri* BUTLER 卵1頭を採集、三角紙に包んでおいた処、6月19日から20日にかけて20個産卵した。この卵をそのままおいたが、6月28日、この卵より幼虫が孵化した。そこで早速本種の食草と云われるマルデを与えてみた。兎が一向に食さないため、その数日前、この卵より孵化した幼虫に非常によく似た幼虫をクスノキの葉上で採集、飼育中である処からヒントを得て、クスノキの新葉を与えてみた。すると、孵化したシンジュサン幼虫はこのクスノキの葉を喰ひ始めた。食納は普通で、現在までずっとクスノキで飼育を続けている。日本昆虫図鑑及平山修次郎氏著「昆虫図譜」によると、本種の食草はニガキ、キハダ、シンジュマルデ等が挙げられていてクスノキと云うのはない。こんな事は案外普通のことかも知れないが記しておく。

(古市景一)

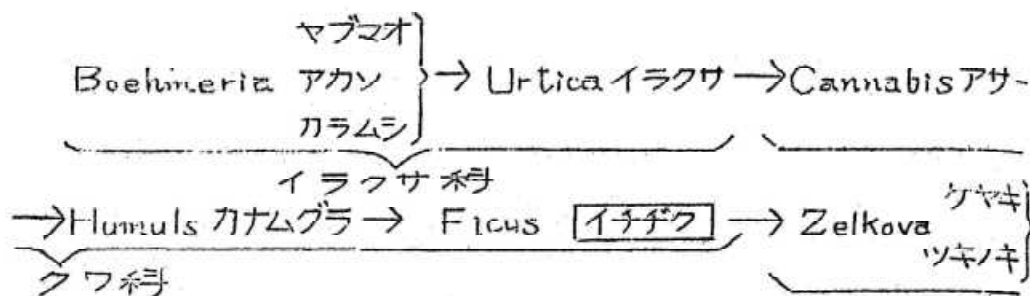
— No. 234 —

イチヂクはアカタテハの食草か？

白神博士は本誌 Vol. 1 No. 5 p. 30~31 に於いて、氏が野外からイチヂクの若葉に本種成虫が産卵するのを観察され、その卵を飼育されて10数頭の内2頭の羽化をみた事から一応本種の食草としてイチヂクを記録された。その後筆者もこの事実をはっきり確かめたいと思つて昨年、本年と2回の実験を試みた。しかし供試虫数少なく又不備な事が多かったため、はっきりした事実を得ることは出来なかつたが、一応ここにその結果を報告する。まず昨年5月越冬成虫により産卵された孵化した幼虫(2~3卵)を10頭程野外から採集してイチヂクを供したところこれは設備不完全のため全部死亡してしまつた。しかしイチヂクにわずかの食痕が残されていた。結局これは失敗した。さて本年は自宅附近にて、2/V, 4/V ヤブマオより卵を採集6/V 孵化した幼虫を5頭イチヂクに7/V 放飼した。しかしその結果は一個の食痕を残すことなく、1/V までには至るまで死亡してしまつた。そこで1/V 孵化して先に供用した5頭を除いた残りの個体をすべてヤブマオで飼育していたが、その内2母になつたものを5頭ヤブマオよりイチヂクに移した。その結果は前例と同様の経過をたどる。

に移したものが16/V までには全部死亡した。以上の如く第2・3回の実験では10頭(1母・5頭, 2母・5頭)の幼虫は全然イチヂクと食することなく死亡してしまつたのであつた。しかし第1回の実験では死亡したが、イチヂクにはわずかの食痕が残されたことから全然食さないでとない種である。結局、筆者のイチヂク実験の結果は大體否定的な結論となつたのであるが、次にイチヂクが本種の食草と知られている他の植物と植物分類学的にどの様な近縁性を有しているか等の点について検討してみたい。これらの点について検討することは無意味であるという方がおられるかも知れないが、蝶とその食草たる植物との関連は一部のものを除いてはかなり密接である(向坂道治, 新昆虫 Vol. 5 No. 10, 1951)ので、筆者は決して意味のない事ではないと考へる。さて従来知られている本種の食草はすべて、イラクサ科 Urticaceae, クワ科 Moraceae, ニレ科 Linnaeaceae の3科でこれらはイラクサ目 Urticales に属し、イラクサ目にはこの3科のみである。そしてこれらの科の内から食草として知られる属を抜き出し、分類学的に排列整理してイチヂクの位置を示すと次のようになる。(牧野 1948 による)

x 江崎・白水：日本の蝶(1951)



上に示した如くイチヂクは植物分類学的に考えられる Boehmeria 属から Ulmus 属への移行に於いて、Humulus カナムグラと Zelkova ケヤキツキノキの間に位置し Zelkova よりも Humulus に近い。植物分類学的にはイチヂクは今迄知られる侵草とそんなに飛び離れた位置にはなく、アカタテハがその中を侵草としても別に不思議はないものである。以上まともなく述べて来たのであるが、アカタテハが一般にはイチヂクを食料にするのとすると、他の昆虫で知られる様に、イチヂクを侵す一つの系統があるのではないか、又私がした実験に於いて使用したイチヂクは多少日本産と思われる。最近広まっている洋種では侵すのかと知れない等の疑問が生れて来るのである。或は当地では本種の普通の侵草であるヤブマオが5月上～中旬に新芽を出すのに対し、イチヂクは早くも4月中旬には新芽を出すので、成虫の

早い母蛾は産卵するにもまだ侵草がないので、困って?仕うなくそれに近いイチヂクに産むのではないかと考えられるが、これは蛇足である。要するに私はイチヂクはアカタテハの侵草として決して適当ではないと思うのである。たとえアカタテハがイチヂクを侵草としても、それは新しい芽の出ている春期だけで、ヤブマオの様に成虫の発生している向中その侵草となり得ることはないと思う。春期を過ぎた葉は留くて若母幼虫の到達處のたまたまのところであろう。つまり一時的な侵草である。今後イラクサ科系統をアカタテハ幼虫に与えてその嗜好度、適当か不適当かなどの点について実験してみれば面白い結果が得られるであろう。私も今後更に調査を進めたいと思つていますが各誌時代にまかされてご一応御注意あると幸をお盼がいしたい。最後につづらぬい胸ばかり長々と書き綴り、御座る紙面を浪費した徳を身負う所に於いて詫言して筆をおく。

(広瀬義躬)

ウリハムシの 花卉食害

本種は各種の植物に加害する雑食性の種であるが、ここにその花卉食害の例を記録したりて報告する。

A) タンボボ(黄) 1953年4月19日、酒津水門で1頭の本種がゆしべを食していた。

B) アブラナ(黄) 同年4月26日、酒津水門で観察したところによれば、本種が栽培してあるアブラナの花上によく飛来しており、花卉及ゆしべを食害してその害は少なくない様である。何物加害の一例として報告する。

— No. 236 (広瀬義躬)
ドウガネブイブイの

威嚇動作

Anomala cupreoides Hope ドウガネブイブイはブドウ、ダイズ、クリ等の害虫として著名であるが、非常に雑食性でその他にも広く各種の植物を食害する。ところで彼等は飛食している際、又どうでない時でも、特にクリ、カシ等の場目にはしばしば見られるところであるが、大抵1枚の葉を1匹が占有して、おさまりがさっている。この場合前脚は高く、中脚、後脚で葉の面積を広くかかっている姿勢がよく見られる。この様なところへ他のもの、例えは他のドウガネブイブイが現れ、近

接すれば、後脚を盛んに体を動かして、後脚でさって適当な人と試みるのである。この動作は常時見られるものではなく、比較的限られた活動の場合と考えられるが、一般的である。これは樹液に食っている場合のカナブン、カブトムシ等のそれとほとんど同じ意味をなす動作であろう。(小野洋)

— No. 237 — ヒオドリクチョウ成虫 の発音

蝶の成虫で発音するものとしては、既にクジヤクチョウ、及本種などが知られている。特にクジヤクチョウについては多くの観察がある。筆者は本年6月上旬、本種を栽培中にさして飼こその発音と認められるものを観察したのでその状態とここに報告する。

先づ、木村氏(1952)、荒巻氏(1952)がクジヤクチョウでやられたように飼育箱内に於いて、飼育箱を振動させたりして驚かして見たが全然発音せず、次に飼育箱より取出し、手を近づけるとシヤツ、シヤツと発音するものもあった。翅ををつまむと例外なくいづれど発音した。その様子は、普通にガクジヤクチョウで述べられた如く威嚇姿勢という程のものではない。決して形密すれば、うるごうごうとびったり内だた姿勢から素早く翅を半折し1、2回発音するものである。なお荒巻氏は本種の発音観察を記さ

40(113)

以上の報告中、発音はガサツ、ガサツ、
と言う事に雑な音であるとされている
が、筆者の聞いた発音は、鹿島氏(1
953)と同様、前述の如くシヤツ、シ
ヤツと言う音で、3~4m 高にいて
は聞えない程のものだった。羽化後
日数が立ったものは、幸分荒喜氏の記
された如き大きい音を出すのであろう。

ヒオドシチヨウの発音については次
の報告しかみていない。

- 1) 荒喜高(1952): クジヤクチヨ
ウの発音について— 第2報—
いずみ 1 (3/4): 59-60
- 2) 鹿島毅(1953): ヒオドシチヨ
ウの発音, 新昆虫 6 (6): 48

(広瀬義躬)

— No. 238 —

アオスジアゲハの 地域占有2型

1) 樹上空向占有: 1949年夏か
ら1952年夏まで倉敷市鶴形山での観
察であるが、本種は或る特殊な環境の
場合、一定の樹上の空間を占有する習
性を持つと考えられる。すなわち、観
察地の環境は周囲が樹木に囲れた5m
平方位の空地で目を上に転ずると、ほ
っかりと青い空が見え、樹木とすれす
れに本種はその空間を飛翔している。
常に2~3頭が飛翔して、他の蝶が来
れば追跡するが、同種の蝶では強くな
く、交尾的動作をしばしば見られる。

樹木の高さは5~6mで、上空から
観察することが出来ない。ほとん
ど(わからないが)、下から見たところ
は飛翔占有している本種は殆んど触
することがない林である。時として
5~10m平方の空地へ下降して来るが、
周囲の何物にと止ることなく、直ちに
又上空へ飛んで行ってしまふ。これ
より似た観察に黒佐氏*(1952)が
り、この観察ではクスの大木の上空に
1頭の本種が滑空して30分以上上空
へ飛び去ることなく隙間を通りかか
る蝶があれば、その度毎に益々で舞
っていたと云うのであるが、鶴形山
はその上を飛翔する樹木は本種の棲
のクスではなく、種の雑多の喬木から
なる混生林である。

2) 樹陰占有: 夏季の候、倉敷市
形山トンネル上のヤブカラシの花に
る本種の活躍は驚くべきであるが
時として今迄活躍に活動して来たこ
が急に樹陰に飛来することがあり、
の時は翅を小さく折りこむらせて1m
平方位の空間を占有している様に観
られる。この場合著しくその活躍が
失われこの機会に敏捷な本種をネット
に入れる場合も少くない。決して止
ることなく常に単独である。この習性
偶然か知らぬが、夏季特に日光の
射の激しい7、8月の候にのみしか

* 黒佐和義(1952): 大分県佐伯町
の蝶類, 新昆虫 5 (10): 35-36

察していない。曇さからの一時的逃避と見るのはあまりにも臆測であろうか。アゲハチョウ類の内では特にアゲハ等は夏季8月頃の午後からは殆んど活動せず樹陰で飛翔したり、草に止つたりしており、これらの事実も曇さからの逃避と考へられ、本種に於けるこの習性もそれと同じく弱い占有性の新種だと思へされる。霧山では各処に本種が多いのでトンネル上り下りのみならず各処でかくの如き習性を観察している。筆者の記した本誌 Vol. 1 No. 9 p. 53-54 の観察例もこの習性に他ならない。但し、あの例では顕著な占有場所の移動が観察されたことは注目すべきである。あの例では他の昆虫の侵入によって弱い占有の確認が出来たが、その他の例はまたその奥を窺はぬ機会がない。

以上筆者の知る蝶の地域占有の類型の中から本種の2型を記した。蝶の地域占有性追及になんらかの参考ともなれば幸である。但し、上記2型とも各例に於いて否、早を記録していないので従来知られるようにこの占有性が合のみに限られるか否かの奥については不明である。(広瀬義躬)

— No. 239 —

リマグロビヨウモンの 山頂占有性

本種は日本産ビヨウモンチョウ類の

中であつて周年経過に於いて多化性を示す唯一の種類であり、その生態は *Argynnis* の類とはかなり異なる。ここに述べる山頂占有性をその一つに教へ上げらるべきものである。すなわち筆者が1950年〜52年香取郡山手村霧山(標高300m)で、又1951年6月17日、52年7月18日、8月22日、岡山市金山(標高500m)でいずれも山頂附近に於いて観察したところでは、キアゲハに於いて見られる如き顕著な山頂附近を占有する習性を観察している。この習性を示すのは常に合のみであり、先ずその占有場所(山頂附近の平地になつた荒地及道路)で、直接静止する場合は上及単独生えている植物の先端部等である。広い地域に於いてはその占有場所は分書され2〜3頭の場合で占有、1合が飛去つたばその附近にいる合が全部飛立追飛を行ふ。飛翔高度は通常1.5〜2mであるが、追飛の際には地上10合の高さにまで達する飛翔を行ふ。霧山山頂ではその占有地域に交尾がよく観察されるので、この習性の意義が交尾の爲であるとも考へられる。

本種に山頂に集る傾向が改められることは本弘氏(1952)*を記されており一般に山頂山腹には合が多いと述べられては居るが、霧山山頂に於いては同種

*本弘道雄(1952):三重県産蝶類目録(才1集), 産物誌 4(20): 39-41

42(115)

であり、♀1頭に対して♂10余頭の割合である。稲山山頂に於ける本種は山頂付近で発生しているとは考へられず、多分山麓付近で発生したものが飛来するものである。筆者は又ヒヨウモンチョウ類に於いてこれとは異った地域占有の1型を知るが、これについては更に多くの観察例を得てから発表したい。(広瀬義躬)

—No. 240—

ムシヒキアブ捕食 2題

1) シオヤアブの好餌となつたドウガネブイブイ: *Promachus yesonicus* Bigot シオヤアブの幼虫はコガネムシ類の幼虫を食し、成虫は更に最も普通のムシヒキアブである。多くの昆虫類は彼等の好餌となり、その頑強な口吻は硬く、見事な鎧をつけた甲虫類を造作なく血漿にされる。去る7月28日には岡大農学部でドウガネブイブイが受餌に使せられていた。ありふれてはいるが一応記しておく。シオヤアブはドウガネブイブイの前翅を押し上げて口吻をさし込んでいるのが見られた。

(小野 洋)

2) サキブロムシヒキのコミスジ捕食: 1953年7月26日、岡山市金山方面へ採集を試みた際、金山山頂に於いてサキブロムシヒキ *Machimus scutellaris* Coquillett がコミス

ジ1只とくわえて飛んでいるのを採集した。コミスジは一寸弱っている程度であり、アブが捕まてからその面積を著しく採集したのらしい。アブの同定を困難にした小野洋氏に感謝の意を表す。(広瀬義躬)

—No. 241—

蝶の訪燈数例

蝶の燈火に飛来する事実はよく知られ、その観察例も多い。以下本年8月以降筆者の観察した蝶の訪燈例を記す。以下記す6例が、いずれもイチモンジセリ(1)とヒメジマノメであるのは、本誌Vol. 3 No. 2に一寸触れておいたが、その日廻活動と関連して注目すべき点がある。

1) ヒメジマノメ 1頭 VIII-3

P. M. 8:30 燈火(60W)

2) イチモンジセリ 1頭 IX-1

P. M. 10:00 燈火(60W)

3) 全 上 1頭 IX-7

P. M. 9:10 燈火(40W)

4) 全 上 1頭 IX-15

P. M. 8:30 燈火(40W)

5) ヒメジマノメ 1頭 IX-18

P. M. 6:30 燈火(100W?)

於 岡山市内山下岡山東立図書館

6) イチモンジセリ 1頭 IX-21

P. M. 10:00 燈火(40W)

訪燈場所として特記すべきものはすべて、市田之上の自宅である。

—No. 242— (広瀬義躬)

ヤマトシジミ♀の再 交尾

筆者等は最近本種♀の再交尾を観察しているのをごここに報告して読者の御教示を仰ぎたい。

1953年8月13日 A. M. 10:30
倉敷市田之上に於ける観察である。

本種♀1頭がカタバミに1卵を産附後その葉上に静止していた。すると前方より1頭の♂が飛来、直ちに交尾してしまつた。交尾態解型式は♂+♀→産附されたその卵は全日16日孵化したのが無精卵ではなく、産つて母蝶が産卵前交尾している事実が確認された。この蝶の再交尾の問題に関しては、新村大朗氏の“蝶は身寄者”と題する一文(新昆虫 Vol. 3, No. 3, 1950)等があり、この例と考之合わせると面白いと思われる。

(広瀬義躬)

— No. 243 —

倉敷産ラミーカミキリ 小記補遺

筆者は既に本誌 Vol. 2 No. 10 に於いて「倉敷産ラミーカミキリ小記」なる一文を記したが、その内越冬について1月1日に本種幼虫をヤブマオ植莖中よりの採集 辻藤氏の飼育により1頭が5月に羽化したことから、本種の越冬態を幼虫と断じ、ヤブマオの株

中にて越冬するものであろうと報告した。しかし1月以降しばしば黒田へ採集に行ったが、採集する事が出来ず、1月以降、羽化までの野外に於ける経過が不明であった。しかしながら、本年3月下旬～4月上旬に倉敷に於ける本種の発生地の一つである、倉敷市津水門に於いて本種幼虫を多数採集、飼育の結果その一部を羽化させる事が出来たのでここに補遺として記しておく次第である。

ラミーカミキリ幼虫採集記録

III-30採集 20*(4)[△]△ V-17蛹

発見 (V-13, 14 孵化確定), VII-7 羽化

16 (3) 死亡

10 (2) 死亡

IV-1 採集

27 (5) ≪

13 (3) ≪

IV-7 採集

25 (5) ≪

23 (3.5) △ VI-13 羽化

その後羽化することなく死亡

15 (2.5) △ 死亡

註)

*体長+体幅長△栄養不良にして淡赤紫色を呈しているもの、長さ単位mm以上の如く各幼虫向に著しい体長の差異が認められた(10~27mm)、これは一株を2~3頭の幼虫が占有する場合に顕著に認められた。

44 (117)

幼虫は地下かなり深く株中に潜入してあり、1月の場合とかなり異なっていたことは注目すべきである。

なお、VI-7 室内にて本種成虫1頭を採集したが、これは先の記録に記した III-30 採集、飼育中逃亡の1頭がそれであることは殆んど間違いない。

(広瀬義躬)

— No. 244 —

ホシミスジ Memo(1)

1) 交尾資料: 1953年8月16日

P.M. 1:30 豊後市鶴形山に於いて、遂に待望の本種の交尾を観察する機会を得たがその交尾飛翔型式確認に一抹の不安があり、この点発表するのさぞうかと思うが、交尾状態その他について参考迄にその状況を記したい。

筆者の観察した時は既に交尾し物音に驚いたか飛翔中であり、やはり地上1.5m程度の樹木上に静止、しばらくして又飛翔し又地上2m程度の灌木上に静止した。静止の際飛翔する方向の個体は横割しになっている。そこで採集の精確(但一方合は取逃がす)合+♀→の型式を認めしたが、榮りカを入手しすぎてバネを振ったため翅等が破れ交尾前の特徴を見失ってしまったのでここに一抹の不安がある次第である。しかし合+♀→のこの型式で飛んだことは殆んど確実であって、同属のコミスジではこの型式を確認し

ている。

2) 日廻活動及び睡眠について: 本種は当地方に於いては集団的に棲息するという傾向が見られないので(村橋氏はその著「日本蝶類解説」に於いて本種の項で“棲息地には多くの個体が群飛しているのが普通である”と記されているので他地方一帯に本州中部山地帯一帯は集団的傾向が見られるのかわからないが、当地では分散的で、そうかといつて個体数が少いというわけではなく、市街地にておその飛翔をみる程普遍的である。)、数量的にその日廻活動を観察することは出来な(け)から活動の山がいつれにあるか不明である。しかし何時頃から飛び立し、又睡眠行動に移るかは、個々の観察より判明している。先ず、7~8月頃飛び始める時刻は8時頃からで、睡眠を求めた頃ぐらを深しているのは5時~5時50頃で、他の一般の蝶類の日廻活動とさして変りはない様である。1952年6月(日付忘失)豊後市住吉町、近藤光宏氏宅の庭で偶然観察した本種の睡眠に入る行動を記すと、成虫は睡眠の場所を求めて樹向を飛んでいたが、やはり地上2m程のツバキの葉裏にぶらさがった。しばらく翅を内ぢたり、開いたりしていたが次第に動かなくなつた翅はぴったり内ぢられ融角は前方にゆるく伸びていた。時刻はP.M. 5:20。 — No. 245 — (広瀬義躬)

附記：詳細は後日記載するつもりです。

形態その他 資料

モンキチョウの雌雄型を採集す

筆者1952年6月15日、信濃市酒津に於いてモンキチョウのGynandromorphと思われるものを採集している。すなわち表面は^{大体}♀、石合であるが、左後翅の翅脈に沿い数條の雄斑が走っている。左前翅は殆んど白色斑紋であるが、前縁部等に少量の雄斑紋を装う。裏面は表面よりの石翅は表面よりも更に濃色に雄斑紋を呈しているが、表面よりの左翅は前、後翅表裏面よりも更に多数の黄條が翅脈に沿って走り白斑は1/3程度である。交尾器は♀、右翅(♂状)よりも左翅(♀状)の方が大きい。号送發表された本種の雌雄型で私の知るものは、江崎梯三博士がZephyrusに記された「日本産蝶類の既知雌雄型目録」の内、藤村Leech記載のものを記されておられるのと、横田栄三郎氏のもの(昆虫界, 10(102) p. 517, 1942)である。前者はそのCopyを紛失したので比較する事が出来ないが、横田氏のものと比較すると、裏面に於いて雌雄の色彩は四翅に於いて入り交わる等の1.

2の差を除けばかなり酷似する。
-No. 246- (♀、頭蓋、身元)。

紀州のイタドリハムシ

先に「すゞむし」Vol. 3 No. 5に小野洋氏が物見峠のイタドリハムシの翅斑斑紋について書いておられたが、筆者は今年(1953年)4月初旬、紀州(新宮附近)を旅行して該地のイタドリハムシの翅斑斑紋が非常に変わっているのに気付いたので御参考までに記しておこう。

筆者の採集したイタドリハムシは翅鞘の三帯紋が大へん太く、しかも非常に濃いル褐色乃至、赤褐色を呈し、黒色部を極めてあざやかな黒色で、黒色部、褐色部はくつきりと区別出来、全体として黒味を帯びる。その為、最初採集した時はイタドリハムシとは思えなかった位である。普通、広島地方に産するものは、白木山、極楽寺山等の山地のものであるが、その三帯紋はさして太くなく、黄色であってこんなに濃くなくなったものは見ない。採集地は、和歌山県那智山、同串本町太島、三重県南牟婁郡木本町、同新宮村等であり、それぞれ数個体あて採集した。何故この様に黒味をおびた個体ばかり現れるのか原因は簡単ではないが、此地も後方に急峻な紀伊山脈をひかえているため山地性のTypeが現れたのだろうかと思われる。それとも南国の太陽の下で、Melanism 発現したのかも知れない。

46(119)

か?とにかく面白いと思つた。様子は筆者並びに蔵本博光君が所蔵している。

—No. 247— (古市景一)

アブラゼミの寄生菌?

1953年8月23日 香取市鵜形山で研究用にアブラゼミを採集したので歩いてしていると足許にバタバタと羽ばたいて転んでいるアブラゼミの1匹を発見、手に取ってみると腹部と後脚部との間が一寸口を隔いたような状態となつているのでその内部をみたところ、黄色のネバネバしたものが臍腔内にいっぱい詰まっていた。何か原因でこのようになったか知らぬが、何かの菌に寄生されて起つた病気であるように思ふ。噂は飛ぶことは出来ないが、またかなり元気があった。本誌誌に書いてその原因等を敬示下されば甚だ幸いと思ふ。

(広瀬義躬)

—No. 248—

ヤコンオサムシの性比

筆者はCarabus属のlocal var-

＜ヤコンオサムシの性比＞ (古市

日付	性比	♂	♀	総数	性比
1953.VII.11		8	20	28	1:2.5
〃 VII.12		5	10	15	1:2
〃 13		6	13	19	1:2.2
〃 14		7	10	17	1:1.4
〃 15		1	4	5	1:4
総計		27	57	84	1:2.1

riationを調査する目的でCarabus属を多数集めているが、採集後、豊島郡柳井村尾原で採集したヤコンオサムシApelomopteris yamashimae Batesの性比が著しく偏っているのに気が付いたので、この中から一端を記し、参考にしたいと思ふ。なお、これらのヤコンオサムシは雄とカラメをどろどろにした末を瓶に入れて地中に埋め、これによって誘殺した。性の識別は尾端のGenitalia(交尾器)によつた。

下記が表に示した如く、♂と♀の比率は大体1:2で、♀の方が♂の約2倍に多いことが知られる。この誘殺法による採集は、瓶の周囲のものが大抵1つ1つに採集出来ると思はれるので、自然採集に於ける性比とこれとほぼ近い値と思はれる。この中に♂と♀で採集効果がかなり異なるのは興味深い。現在、このヤコンオサムシの飼育、交配を計画しているので、性比についてと今後調査を続けていこうと思つている。なお、筆者はCarabus属のlocal var-

(景一)
註) ♀を1と
して比を出
した。

—No. 249—

汽車による 蝶の移動の1例

汽車、船舶、その他種々の交通機関
によって昆虫が移動することは、よく
あることであるが、最近交通報告の中
に例が少なくない。これによって行われ
た個体の種別数はそれぞれ1、2の例を

× ×
 × ×

知ることが、最近ヒメシヤノメに於
てその例を知ることが出来た。

つまり、本年9月11日、留敷駅よ
り旧常陸上り急行電 A、M 7:58 の列
車に乗ったところ、列車が同じ駅内
に入った時に車中で急にバタバタと
いかにヒメシヤノメ1頭(多分♀)に気付
いた。目撃時刻は A、M 7:20 位であ
る。

(広瀬長男)

— No. 250 —

（信）（敷）（南）（部）（山）（脈） — 4 月 —

= 小野洋 =

（縦）（走）（採）（集）（報）（告）

去る4月27日、本会の方針 近畿西村と共に、市南部に横たわること小山脈を
訪れる意味で、藤戸附近から五軒屋あたりまで歩いてみたので、当日の様子を
簡潔に報告する。

この山脈、東は阿波のタコラ山に達する。西は高松川附近まで伸びている。山脈
は内海に接しているもので、従来その植物種の豊弱なことから知られていない。
藤戸附近は地質が多少調査されている種であるがやはり fauna は豊弱との
こと。地質によって大抵の森林に於て、同じである種だという等々にかたほと
んど手が着けられていないと云う現状である。

藤戸でバスを降り、気持ちよい田舎道を高々と細をかついた人が歩を違ふ。
ちろ分の上の地帯を寛ながら、傍らに燈籠などがあると反野山登山にうなずく。
建山山に向うに仰ぐ畑が入りくんだ、やが山が来たあたりはかなり樹林で、溝
谷ではあるが、汗は汗顔を打ちこちと動かす事があった。アゲハ、モンシロキ
等は盛んで、アシナガバチの仲間をきいて、先頭に飛び交うハニシジミを
追って追ったが、翅の色が鮮やかでない。道に沿った小川にはスイスイと交尾してい
るアメンボが深山見られる。その上を巨きな飛び交うアメンボが大部。さ
やかになって来たように、ホニイトトンボはずいぶん流石だが、この外オクササ
ナエ、フタスシツナエと元気で、ハラビロトンボの半も時折畑の上を飛んでい

48(121)

る。道がや、坂になってくるとモンキチョウ、ツツメシジミが現れる。シマヘビがうごめく草むらで、越冬したクビキリギリスが2、3重そうに体を動かしているのを見ながら進んで行くと、やがて目前が峠として、大きな池が目に入る。池の水の色はエメラルド、対岸の樹木の緑と調和してとても美しい。そこへ、おれを見よとばかりに翅をきらめかしながらムラサキシジミが出て来た。このあたりで現れたツマキチョウは今日最初のものがあったし、X組のシオヤトンボも早く、恐い顔のハンミョウも、それから、そろそろに飛び出すビロウドツリアブのふんわりとビロウドで体を包んだ姿も一行の目を楽しませる。友野代がマルガタゴミなどを採集した石下にはアシコマツキが落ちていた。右に山を仰ぎながら左側には2、3つと池が続く。シオヤトンボと一語にどうどうヤマセセリとツツメが顔を見せた。サルトリイバラに産卵するハリタテノミ足を止め、クルクルと水面を動くミズマシを眺めていると、遠く近くハルビミの音が聞えてくる。せまくなってきた道の西側にはドクガの幼虫や、アワフキの幼虫がムツツリひかえていた。近藤代がクシビゲナガハナノミを入れた網を突き出す。この辺でキバナホソコマツキとセマダラコガネに似たコガネムシ1種を採集した。飛んで来たウスモンクシガムシに似たガムシ1種を採って、ヒョウと顔を見るとフジの1種にフジムシが群がっている。このあたりで友野代は、X組を飛翔するういいういギンヤンマリ早くともういっちな早業で捕らにした。やがてニワハンミョウが現れ、バウバウと飛び並ぶツグミの音に驚かされるが、いよいよ種山頂に向かって登山を開始した。頂上に近くなったあたりに鳥居があって、傍の池はたっぷりと水をたへえ、グリーンと底まで青い。頂上に達した3人は上衣をぬいだ。展望は上々で四方は手にとる如く、遠くかすみ水島灘、高梁川の流れ……と見てゆく。夕コラ山阿辺はやはり商業梅林多く、染抜いたように明るい緑に包まれている。ここにはヤマセセリが多く、アゲハやハルシジミがやって来ると元気に追飛する。昼食の間、空中のフマ(+)を見ていると、や、あってブーンという羽音を立て、ウバタマコマツキが現れる。クシコマツキを割に出ているようである。頂上は大きな樹木にめぐまれず、少し降りればどうアカマツである。五軒屋に向かって下山。ウリハムシが非常に多かった。ところどころの葉陰にはムシヒキアブがひかえている。相当道を迷いながらやっと浦田附近に出る。ひらひらと羽化したアゲハカワトンボも早くも空に飛び交う。シオヤトンボの産卵を見ていると、傍を過ぎるクロアゲハが視野に入る。このあたりでハルビミの音が急に大きく聞えて来た。下草近くでいっせいに飛ぶオツネトンボとホソミオツ

ネットンボを見出し、直に網にした。朝夕にも見かけた標本、本2種は巻数近所(福山、黒田)で既にいくらも記録してあるものであるが、市庁部での再確認と云うことになる。だから今日一日で日本産越冬トンボ、ホソミイトトンボを加えた3種全部を記録したわけである。

浦田の一部には道程によって多少向葉帯林が立並び、この日の道程に於て最も注目されたところである。キクスイカミキリ、トラフトンボ、ウラギンシジミ、カタデハ、ヒメウラナミシヤノメを目撃する。畑上にはスジグロシロナヨウがほとんどなやかであった。この附近の路傍にはミヤコグサがげつと顔と並べており、シルヴァシアシジミも断然期待出来るところである。ノコギリヒラタカメムシが2・3路上を飛翔する。予定の道程を歩き終え、サナエトンボを遡って五軒屋に出た頃には盛んな一庭のびていた。(終)

創刊3週年記念号(Vol.4 No.1~新年号) 原 禾高 募集

本誌では本誌が1981年(昭和26年)1月創刊以来、明年1月で3週年を迎えますので、これを記念致しまして記念号の発行を計画致し Vol.4 No.1をこれに当てるべく考へております。よって広く会員諸氏より記念号用原稿を募集します。ふるって御投稿下さい。

大 見 定

- 種類 “昆虫に関するもの” ならんてとよい。特に報文、おとしぶみ、ズイビツ関係を歓迎します。
- 用紙 絶対原稿用紙使用のこと。なるべく400字づめを使用されたし。
- メモ 10月末日 厳守のこと。
- 宛先 倉敷市田之土 822 広瀬 長身宛
- その他注意事項 あまり原稿の長いものは掲載出来ないかと知れませんがその旨御留意下さい。400字づめ原稿用紙10枚以上はなるべく御送慮下さい。又筆の勝手ながら附図の甚だ多いのを、原稿の長いのと同様にカッターの負担軽減という意味で御送慮下さる様御願ひ致します。原稿の多いは喜ばし、その他いろいろ御留意で掲載出来ないものがあるかと思えます。×1列は絶対守って下さい。原稿の多少にかかわらずメモ前のもので、

50(123)

発行します。なお編集部より記念号掲載用のアンケートなどが会費諸氏の元へ行くかも知れませんが、その前には是非笑懐よく応じらば御返事と下さる様御願致します。

9月号予告 主 内 容 ～ 小野洋巳 及び印刷能

能繁登美子：我が家の庭に於けるカキカラムシ及び蝶と気温との関係

小野弘道：足守町竜堂寺附近の蝶を巡って 旭産報多数

原稿募集・会費納入を乞う

〈はんしゅうこうき〉

毎度のことながら毎月お上に発行のおくられたことにお喜びします。本号は専断持大号として計画し、どこと立派なものにしたいと思っていたのですが計画したのが案であったため、早急に原稿が集まる。送って印刷にすぎなくなり充分所期の目的が達せなかったことは編集者として非常に残念でした。

しかし通巻200篇突破記念と銘付た方としぶみ編には、玉石混濁の感はありまが実に300条編を収録することが出来ましたのは編集者の大きな喜びとするところです。又杉山、安江両先生からの玉稿を賜り、中塚・河田両氏からは立派な投稿をいただき深く感

謝致す次第です。おとしぶみ手紙に4月号で200を越えていたのが5月号で200を大きくはなして記念号としたわけです。實際他の段々会費でどうなるかわかりませんが、自費してはまず。また、おとしぶみに関して、お集者が社に送られたり、またおとぶみ編に送られたりしましたが、これは少しおとしぶみ一編の価値を高めようという意図から編集で行ったもので、この会費に＜御了解下さる様印刷致します。又おとしぶみで掲載出来なかったものも数編ありますが、これは次号にのぞりますので要しからず、卒業の編集印刷には大塚農研の安江先生及河田氏に深く御世話をいたしましたことと感謝します。(H)

す ぐ ら し 専断持大号（おとしぶみ通巻200篇）
第3巻 第3号（8月号）突破記念

昭和28年8月31日 印刷

信教市住吉町 岡山大学大塚農業生物研究所（作物害虫研究室内）

全 発行
はんしゅう・いんさく 広瀬義郎

信教昆虫同好会